いらつめ

第二十五號

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

いらつめ第二十五號目次

社説
日本女服改良會

小説
網窓鶯　第五回

家政
室内粧飾法の内床の間の飾り方
暑中に冷水を飲の害を避くる事
水に溺れたる人を拯ふ事
𦋐の新陳を知る法
卵を貯ふる法

文藝
雨夜の品定め（續き）　たうよ
和文の變遷（第四）　新保磐次君

美術
柳櫻都錦繪（三幕目）大詰　立花家かをる作

批評
新編箏史第二編
立志美談
流行に付て　久平老人

雜纂
日耳曼國音樂の大家（マザート）氏の傳　上眞行
千鳥　立花屋かをる

懸賞文藝
第三回の賞を得たる文と歌俳句
第四回新題

陶器製造法━家計簿記自宅獨修書━手算教科書━仙臺平へついた油垢を落す法━虫齒の痛むのを止める法━男羽織の紋━玉子の食料に付て━額の生際を濃くする法━大聲て物を言ふさき咽喉の痛くなるのを防く法━髮の毛を柔にする法━最上の枕━片腋を直す法━最上の石鹸賣捌所━ランプのホヤを接ぐ法━からろぎの異名━化粧水の使ひ方━わきがを治す法━アザを拔く法━皮膚の毛を除き去る法━口中の爛れや荒れを直す法━居候の事━髮の毛へつける油━尤も眠るに好き位置━赤毛を黑くする法━廿四時中適宜の働方━寄宿舍の正しい女學校━細君が他人に對しての夫の稱謂━髮を洗ふ法━蠅を取る法━蚊のたしかな驅除法━小兒の脾小腹を治する法━毛を生やす法━人參膚白述、貝母の事━ちりめんの汗しみ及び黴氣のシミを落す法━齒の黄色になつたのを白くする法━小說て讀んて害にならぬ書物の名━女子の速記學を學ぶ事━汲に兎をつける原因━皆油の黴を防く法━梅のす漬法━人情小說で無いもので讀んで益になる英文小說

通信問答

餘興
第廿四號質問の解答
質問一題
廿四號　解答

月報

本社移轉

本社今般都合に依り神田區平永町九番地に移轉す

いらつめ第二十五號

社説

日本女服改良會（つゞき）

何事によらず己の意見を世に行ひ世人をして舊慣を棄てゝ新に就かしめんとするには中々容易き事ではありません。世人は善悪とも舊慣には執着し易く改新には就き難きものですから新説を世に行はんとする人は第一自ら率先して己の意見の通り行つて見なければ世人を心服させることの出來ないものです。日外教育上の大問題に就て某博士は新案を工夫して公衆に説て曰く余の新案は余自ら之を行はざれども汝等之を行はざるべからずと申されたことがありましたが斯様な不親切なる冷淡なる改良論者の説は公衆の肺腑には入りがたくアハレ博士數席の講談も冷笑の消す處となりました。また改良者は堅忍不抜の精神と親切熱中の情懐が無くては何事も成りません。新名字新事業は兎角世人の冷笑冷遇を受けるものです。もし改良家にして冷笑を受けて尻込みし冷遇を受けて腹を立てる様では改良家となるの器量の無い人です。改良家は世人よりは一段高き眼孔を具し世人の爲に先導を爲すものなりとの自重心なかるへからざるは勿論のことです。此自重心あれば冷笑を受けては益其熱心を勵まし冷遇を受けては愈其親切を増すべしかくて後始めて冷笑冷遇せしものも熱心に我事業を助くるものとなります。改良家に取りては此自ら率先するの勇氣と堅忍不抜の精神熱中親切の情懐を具ふるとは事業を成すの根抵です。先づ改良首唱者は是丈の覺悟を極め置きさて同志を募る一段に至りては自由の意思撰擇の餘地を與ふるとが必要です。世間の同志を糾合して事業を興さんとするものは往々強迫束縛に傾き易く遂に膠柱の失に陷りて究屈の極瓦解するものが多いです。

しかるに女服改良會は改良家に必要なる本領を具へ同志者を待つによく其道を得たるものと思はれます。再び茲に同會規則の第四條を掲げて其然る所以を示しましやう

本會の會員は本會に於て採用したる改良女服を着用し以て我同胞姉妹を勸誘すべきものとす　但し本會に於て採用したる一種若くは數種の女服に對し異議を有するものは本會に於て更に自己の意に適する女服を採用するに至るまで強て着用するを要せざるものとす

又同規則第十條に全回に於て採用すべき改良女服の有すべき資格を示して

第一　衛生上和洋兩服の如き弊害なきもの

第二　外觀上現今の和服及び洋服よりも優美なるもの

第三　動作に便なる點に於て洋服に劣らざるもの

第四　立禮と坐禮とに共用し得べきもの

第五　經濟上比較的に和洋兩服よりも利あるもの

第六　國産を專用し得べきもの

とありますもし注文通りの衣服が出來れば何人も異存を申すものはありますまい唯第二項丈は隨分難い注文です改良會の所謂優美とは和洋兩服の所謂優美を離して一段上の優美でしよう。しかるに今日の所謂優美とは美術上に謂ふ所の優美よりはまた習慣的の優美に彷徨て居ります。習慣の優美に打勝て和服好も洋服併何れも降服する程の優美を得んとするは中々難いとです。習慣的の優美はまだ〳〵根城が強うムいますから改良會が最初に公衆の目前に持出す改良服は愼重の上にも愼重を加へなければなりません。其形は申す迄もなく色の配合等最注意を要する點です。今日は世人の口冷笑冷語を吐かんとして未だ吐かぬ腹方に膨るゝの世の中ですから一着誤ればは其罵倒する處となりましよう

改良會に付ていふべきとは是丈です。すべて改良の事業は成就して後より見ればは改良の恩賴を歡びまた其事は斯く改良せられざるべからざ抔と心付けども改良の萠芽の間は物好と笑はれ出過ぎものよと彈指せられ甚しきは奇禍を買ふともありました。夫の奴隷解放、監獄改良、禁酒會赤十字事業の剏業者の堪忍熱心親切は改良會諸姉の好龜鑑です。吾儕は諸姉が此等の剏業者と仝じく其功を奏し我姉妹の健康且優美なる服を得るの日を俟ちましよう。

小說

繡鴛鴦　　麹亭飯人

第五回　疑はしき麗緻の鴛鴦

夏ならざるに奇しげに形つくる雲は、是房總に聳ゆる峯にして、冬ならなくに激げしく吹すさぶ嵐は、則砲臺を打つ濤の音なり。遠くして黑きものは島にもや、漁船の碇泊にやあらん。近くして白きものは鷺なるかも、布帆の往來するよてぞ。浮世に遠き漁人が家ならねば、見るべくもあらぬ勝景を、内日さす都に住みて、朝に夕ま眺めらるゝは、抑何處の里にし

て、何人の住居にか。但看れバ少し小高き處に、四疊半ばかりの淨房あり。東の障子一枚開けたれば、其が中なる一脚の机と、湖月抄、春曙抄など記したる書函見ゆ。想ふに清少納言の流を汲むにあらずんば定めて紫式部の風を慕ふ令孃の書齋ならん。然り然り、令孃の書齋なり。それ今湖月抄とある書函を開けて、何の卷にや一冊取り出し、やがて彼の机よ傍れるを見れバ、風姿秀麗にして、態度温柔なる一美人なれバなり。己にして一二枚讀みかけたりと覺えしが。忽ち卷を掩ふて傍へに擲いやり、あゝとばかり嘆息しぬ。さても。さても、かゝる絶景なる土地に、かゝる清潔なる書齋に、ろも何等の不足ありてかと、此の作者にハ疑がハしくて、問ハまくも思ふ折から、

「何か見たら紛れやうかと思ふて、讀みかけて見ても、何だか刷玻璃。」………

少し腹立たしさうに、罪もなき景色を屹と睨まへしが、又心配さうに眉を蹙め、

「春山先生……何の事だらうか、許嫁のある此の身を、………常〻お褒め申すのは、親切に御教授なさるからのこと、それを色の戀のと、……しかし風評立てられたが阿儂の落度、といふて下齒や何かを戴かない譯にハ行かず。」………

ゑゝといひさま机を一ッポッンと打ち

「口惜しい、あの阿轉婆——人を春山さんだッて、自分こそ可怪い癖ゐ。」

終に冷笑を含みながら、

「洋服を着た樣子、オホヽヽヽ——お白粉ばかりゴテ〳〵塗て、眞個に憎らしい、あの春山さんでハない、春日井さんと云た時の顏。」

折からピユ——〳〵といふ聲に、坐を起ちて椽側に出づれバ、何處へ通ふ濵船にか、煙と波を蹴立てゝ駛せ行くなる、正に是雲縹々として山遠く、水淼漫として海廣やかに、夕月の影はや海間に宿りて、鷗の驚き立てるなんど、實よ譎がきたらんやうなり、彼の令孃ハ覺えぞ、

「あゝ佳い景色だこと。」

案下某生更說、爰に又應接所とも覺しき小間に、客と主人の差し向ひ、

「でハ其の書簡ハ、先生の處へ參ッたのに相違ござりませんな、其れなれバお話し致しますが、實ハ如斯いふ次第で。」

………

更に懐中より、一通の書簡を出し、先これをとて主人に渡せば、主人は訝かしげなる面色にて、受け取りて一讀し、

「成程、此の御書面の趣では容易ならぬ。」………

「さあ其處で御座ります、其の波と申しまするのが拙老の女で、三四年前西鳥越の柳川翠といふものへ遣れしましたが、昨夜其の書簡を以ッてまゐりましたので、拙老も驚き、百方糺しましたが、當人も其の書簡を聞いて始めて驚いた位で、全く覺えの無い様子、又幼少の時分から嚴重に敎育置きましたれば、覺えのあらう筈も御座りませんが、只疑がはしいは先生へのお書簡、差出人は確かに女の姓名で、而も中實は鴛鴦の縫もの。」………

「鴛鴦の縫もの……へねえ。」

遽がはしく手に把りて開き見つ、

「成程、これは妙だ、此の翼の具合恰で下畫の通りだ。」

「もし先生、ぞれは貴下のお下畫でございましたか。」

「然です、……が。」

忽ち又訝かしげに、

「『幾久しう』……はゝあ、是でだなあ。」

「何か御心あたりが。」………

「いゝえ、何、しかし是はお案じなさるには及びません。畢竟其の柳川とかいふ方が。此の書面の差出人と、自分の妻と同姓名の處から、疑心暗鬼とやらで、種々に邪推されたので、差出人は別に御座います。」

「別に御座いますか、其れは如何方で。」………

「お話し致さなきやア分明ませんが、實は小生の出る麗澤學校に築地の紳商の女で、春日井波子といふが御座いまするそれが昨日此の書面を寄越しましたが、丁度人に誘引れて花見に行かうといふ折から、門前でそれを受け取り、ぞのまゝ袂へ入れて出ると、何處で落したか遂無くなしたが此の書簡で、ぞれを隅田で拾らッたのが、ぞの柳川といふ方でしたらう、ぞれ御覽なさい、番地は無けれど、確かに築地から出したことが分かりますわ、郵便局の消印で。」

「成程、京橋と御座りますな、いや是は如何も不覺でした、是ばかりでも言ひ說きは出來まするものを。が、今お話しの築地の春日井と申すは、此の程海岸へ大層な普請をしたといふ、あの春日井商店の。」………

「然です。」

「而して其の女の名は波子と、成程、春日井波子、……斯樣同姓同名と事が分明れバ、何も面倒な事は御座いません、いや如何も不圖心配を致しました。」

時に時計、後六時を報じければ、客は其の長座を謝し、且つの事の明了せしを喜びて歸りける。後には主人獨言、

「如何も今日は變だと思ッた。が、彼には許嫁のある身、殊に常々人に勝れて品行の正しい娘、正か此の樣な艶文を寄越す筈はないが、……しかし下畫は自己が書たに違ひはなし、又消印が京橋とあるからは、如何しても彼のやうだ、其の上今日の素振、如何も可怪しい、が、此の鷲鳶は實に能く出來た、自分ながら妙だ。又此の麗緒も手際に出來た、何にしても不審な書簡、……　問ひ質しもせず妻を出すといふのも太早計な話し、麁相ッかしい巡査もあればあるもの。」

折から門外に人あり、高らかに吟じて曰く、「世上悠悠安不足論」と、正に是れ夕月彩霞に包まれて、紙窓の上朦朧たり。

「君や馭者か出來るかエ！」「出來ますともホラ二年程前よ君をお堀の中へ逆樣に陷したとがあるじやないか」

家政

室內粧飾法の中

床の間の飾り方

日本で室內粧飾法といへバ床の間を除いてほとんと外に塲處は無いくらゐのもので、實に床の間といふものほど面白いものは有りません。

床の間にも色々あッてその材料から言へバ唐木づくり、並づくりなどあるのは皆さんも御承知の事でしやうが、右づくり、左づくり、正式、やつしなどに至るとそれに應じて粧飾の法が多分ちがふ、その邊がちと六かしくなります。

右づくりの床の間といふのは地袋、違棚が座敷から見て右の方にあり、そして床が左に有るので、左づくりといふのは丁度それと反對なのです。

正式といふのはちやンと床と地袋と揃ッてあるので、ヤッシの方は地袋が無くて押入になッて居るとか、床が置き床になッて居るとかである事です。

て、床がゝり（床の間と違棚及地袋などを總稱して床がかりといふ）の大きさに就て言へバ普通の家にあるのは大抵

二間床か、一間床か、九尺床で、公供の大部屋などになると四間、五間、乃至十間ぐらゐのもあります。
大きい方の床はこゝに言はぬとしてまづ二間以下の物について書きましやう。
それで床といへバ、之に直接の關係のあるものは左のとほりの品品です、——
第一、花、第二、花瓶、第三、置物、第四、臺、第五、地袋、及び袋戸の模様および色、第六、床土の色、第七床柱の品柄、及び色、及び、掛物。
右九種の中いづれも互に聯合してどれを棄てることも出來ませんが、尤も關係の甚だしいものは、掛物、花、花瓶の三つです。

一　掛物

しかし、掛物の掛け方はその關係が大きな割には六づかしくないもので、一幅物、二幅物、三幅物、或は縱物又は横物など、いづれもそのまゝ掛けて宜しいです。が、二幅及び三幅物に至ッては掛けならべてある工合、どうしても双方の繪が相呼び合ッて居るやうに見せなければなりません。
まづ二幅物に就て之を言へバ、床がゝりが右づくりであるならバ、左の方の幅を色の目を強く感じる物を置くのが至當で即ち墨繪にしろ、彩色入にしろ、兎に角よく、比較して二幅の中ちと重くろしいものを左に置くので、もし床がゝりが左づくりならバ反對になッて宜しいのです。或は一間以上の床に二幅對を掛け、更に二幅の間に別の一幅物をかける事も有りますが、この場合にはすべて中の一幅と他の二幅とは書畫その品を殊にするのが宜しいのです、すなはち、中のが畫ならバ兩脇は書、中のが書ならバ兩脇が畫である事ですが、書の二幅對は畫の二幅對より稀なものですから、まづ前の方の場合が多く出て來るものです。
一幅掛で一間の床を埋め盡くすほどの大幅もありますが、これは掛ける點に於ては何も心配は有ません。
以上はこと〳〵く幅も縱物といふ方に就て言ッたので、猶横物といふ幅もあります。即ち、横物とは横づくりで、長さの割に幅の廣いものです。之には對物は少ないです。これもたゞ掛けてさしつかへは有りません。
しかし、縱物にしろ、横物にしろ、一幅掛けの畫様は右がちか、左がちか、それを床の間に相應させるのが、もし慾を言へバ、望ましいことです。即ち、右づくりの床の間には

左がちの書、左づくりのには右がちの書、これです、書の右かち、左がちといふのは其書様に就て言ふことです。

掛け方に就てはすでに言ひましたから是からは床壁と掛物との取り合はせ方に移りましやう。

床壁にも色々な色が有ります。その色と幅の色と相犯さぬやうにするのが肝要です。水色の壁に掛けるに空色綸子仕立ての幅は非常にわるいです。それ故に綸子の空色と壁の水色と相同じやうであるからで、すなはち双方犯して居ます。すべて色の相違したのが尤も望ましいです。いやむしろ相違したばかりか、よく映り合ふ色が望ましいです。水色の床壁には白茶仕立の幅がもッとも映りのいゝもので、その品のよさは言ひ盡くせるものではありません。

しかしながら場合に因ッては壁と相犯した色の幅を用ゐる事もあります。その時には是非ともその償を置物や何かでするのです。これは極をはりでなくては言へません。(未完)

暑中に冷水を飲むの害を避くる事

暑中には成るべく冷水を飲まぬかよろしい。若し飲むならば咽下す前に少時口中に啣むか左もなくば水を飲む前に冷水を以て顔と手を洗ひ口を嗽ぐやうになさい。此丈の注意を怠りて水當りなどするときは糖蜜と水又はブランデーと水か或は白湯のみを用ゐても治ります。

水に溺れたる人を拯ふ事

見物人が落し游泳を知らぬならは溺れたる人に手を水から外へ出してはいけない」と厳しく大聲にて注意しおき手早く綱か棹か其外何にても手近にありて捕まつたならば濱邊か舟の方へ引寄せらるゝものを投げて遣ると手の届く處ならはそれを一生懸命に捕まるものですから隨分危難を拯ふとの出來るものです。

けれどもハンケチと帽子(誰でも持て居る物)を旨く使へば游泳を知らぬ人でも溺死を救ふとが出來ます。手早くハンケチを陸ならば地面に擴け舟あらば舟板の上に擴け堅い高帽を其眞中お俯伏にしハンケチの四隅を帽子の頂邊にて結び。さて片手にて此結目を執乎と握り帽子を仰向にして水中に飛入らば游泳を知らぬ人でも沈む氣遣はありません。

善く游く人でも注意せざれば危險があります溺れた人に近寄らば直に其二の腕を捕まるやうにしなければ處嫌はずしが

ミ付きて自由に働かせませんから一人を助けんとて二人まで命を失ふことが間々あります。

卵の新陳を知る法

水に投して扁き方を上にするときハ其卵ハ新鮮のものでない證據です

卵を貯ふる法

卵を貯ふる法ハ種種ありますが記者が最良法と考へるのハ空氣の竄入を防く爲殼に新鮮の豚の脂を塗るのです。或ハ石灰水の中に浸したり食塩の中に埋め又ハ鋸屑の下に埋める人もあります。けれども石灰水に入れた卵ハ干枯らびた樣に見え塩に埋めたのも同樣ですが豚の脂を塗つたのハ何時までも新鮮のやうです。佛國にて卵を貯ふるにハ熱湯に漬けるのです。其法鍋に湯を沸らしおき卵を入れたる目籠を其中に突入れ凡一分間にて取出すのです。斯樣すれハ殼の內側に一皮出來て空氣の竄入を防ぎますから腐敗を止めます。

生牛乳を貯ふる法

瓶を丁寧に洗ひ之をよく乾かし牛の乳房より直に乳を搾り込み一杯に滿ちたれハ手早くコルクの栓をなし針金にて確乎と縛りおき別に鍋の底に藁を敷き其上に牛乳の瓶を幾個にてもおき瓶と瓶との間ハ藁を詰め鍋に一杯になる丈にして冷水を注ぎ入れて後之を熱し沸り始めたならバ火を引きて其儘冷却さしめ十分冷めて後藁また鋸屑を滿たしたる籠の中に押込み家にても船にても最涼しき場所におくときハ十八ヶ月間位ハ受合ッて何時も搾り立のやうです。

文藝美術

雨夜の品定め(續き)

たろや。

艶に物耻ぢして恨み云ふべき事をも見知らぬ樣に忍びて、表面ハ强顔く(＝知らず顔に)操作り、心一つに思ひ餘る時ハ、云ハん方無く凄き言の葉、哀れなる歌を咏み置き、慕ぶべき形見を留めて、深き山里、世離れたる海面杯に這ひ隱れぬかし。童に侍りし時女房杯の物語り讀みしを聞きて甚哀れに悲しく心深き事かなと淚をさへなん落とし。侍りし今思ふにハ甚輕輕しく故意ひたる事なり。志深からん男を置きて、目前(の仕打ち)につらき事ありとも、人の心を見知らぬ樣に(＝人

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

の氣も知らない樂み)逃げ隱れて、人を惑はし(=氣をもませ)心をも見んとする程に長き世の物思ひになる、甚あじきなき(=らちもなき)事なり。

〔評〕男女唐犬と心得て哮り立ち食らひ付く淑女固より宜しからざれど、かう又遠慮するも感心せぞ。すべて夫婦の間に物を隱し立てするが第一よからぬ事なり。

(右に云へる如く世を恨みて閑居したる女が傍の人にオヒヤヲレ)「心深しや」など譽め立てられて哀れ進みぬれば、やがて尼に成りぬかし。思ひ立つ(最初の)程は甚心澄める樣にて世に顧みすべくも思へらず(=思て居ず)。「いで、あな悲し。かく將思ぼし成りにけるよ(=斯まで明らめ給ひける事よ)」など樣に相識れる人來訪ひ、(又は此の尼がまだ未練を殘して)一向に憂し(=氣まづい)とも思ひ離れぬ男(即ち尼が捨てて來たる男が此の遁世の事を)聞き付けて涙落とせば、(尼に)仕ふる老婢など(之を聞きて)「(男)君の御心は哀れなりけるものを、可惜御身を(捨て給ひし御短慮さよ)」など云ふに、(尼も)自ら額髮を搔き探りて、あへなく(=こらえ性なく)心細ければ、打ち嚬みぬかし。忍ぶれど涙こぼれ初めぬれば、折折每に得念じ得ず(=こらえ兼ね悔しき事も多かんめるよ佛も中中

心汚しと見給ひつべし。

〔評〕此の段女の煽動られ易き有樣感じの鋭き有樣、後悔の早き有樣を寫し出だして遺憾なし。殊に思ひ立つ程は甚心澄める樣にて世に顧みすべくも思へらぞ」と云ふ處に言ふべからざる旨味あり。

濁りに染める程よりも、生悟びにては却りて惡しき道にも漂ひぬべくぞ覺ゆる。

〔評〕英雄の夫を尋ねわびてミスで暮らさん抔云ふ心高き淑女(もし有らば)深く味ひ給ふべし。事は異なりと雖も、其の趣きは一なり。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

すべて萬の事平抑に怨ずべき事をば見知る樣に諷めかし、恨むべからん節(=かど)をも憎からず諷め做さば、其に付て可愛も增さりぬべし。……餘り無下に打ち緩べ、見放ちたるも心易く愛たき樣なれど、おのづから輕き方にぞ覺ゆ侍かし。

〔評〕故ふ日く「狐色に燒くべし。」然れども是れ尋常才女の手際の及ぶ所に非ず。己を得ずば左の一つあるのみ。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

兎も角も違ふべからん節(=夫の不品行)あらんを寛大に見

忍ばんより外に増すことあるまじかりけり。

〔評〕かく言ひ來らバ看客或ハ宜はん「是れ男尊女卑の古式にして開明の今日ニ不都合なる教へなり。」されバ其の事に候ふ。道理ハ益開明して實際ハ益暗黒に趣く時代も有る事を看客ハ知り給へりや。左樣ならん世に生れて是れ計りの御辛抱が出來ざらんにハ、男女唐犬あらんのみ、怨恨遁世あらんのみ、然らざれバ憂鬱に死するあらんのみ。無理非道に堪へざるの人ハ當世ニ立ち難し。是を以て眞正の教育家ハ子女に向て眞正の教育を施さざるなり。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

萬の事に比へて思ぼせ。木の道の匠の萬の物を心に任せて作り出すも、臨時の玩び物の、其の物と跡も定まらぬ(=何何の物と定まりたる故實も無き)ハ、歪き洒落バみたるも(若にならず)、實に斯うも爲つべかりけりと(色色に尤らしく仕成し)、時に付けつつ樣を替へて(胡麻かすから)今めかしきに目移りて愛しきもあり。大事として誠に嚴重しき人の調度の飾りとする定まれる樣(=式)ある物を難なく仕出づる事なん猶眞の物の上手ハ樣異に見え分かれ侍る。又繪所に上手多かれど、墨書きに撰ばれて、次次に更に劣り優る差別容易しも見え分れず。斯かれど人の見及ばぬ蓬萊の山、荒海の怒れる魚の姿、唐國の烈しき獸の形、目に見えぬ鬼の顏抔の驚怪しく作りたる物ハ心に任せて一際人の目を驚かして、實にハ似ざらめど、然て(へ勘辨しても)ありぬべし。尋常の山の位置、水の流れ、目に近き人の家居有樣(の)實にと見え懷かしく和らびたる形などを閑に書き交ぜて、峻峭ならぬ山の氣色木深く世離れて疊み成し、氣近き籬の中をバ其の用意計畫などをなん上手ハ甚勢異に(書き)劣者ハ及ばぬ所多かんめる。手を書きたるにも深き事ハ無くて此處彼處の點長に走り書き、そこハかと無く(=何の主意も無く)氣色バめる(=氣取りたる)ハ、打見るに才才しく氣色立ちたれど、猶眞の筋を細やかに書き得たるハ表面の筆消えて見ゆれど、今一度(丁寧に)取り並べて見れバ猶實になん歸着ける。はかなき事だに斯くこそ侍れ、況して人の心の時に當りて氣色ばめらん目前の艶情をバ得賴むまじく思ふ給へ侍る。

(ここらで御仕舞)

和文の變遷

新保磐次

順徳院の御言に「延喜以後歌の見べき者ハ唯公任と經信の

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

み。」と。誠や、延喜以後の歌は大凡古今集時代の體を目的とし、目覺ましく珍しきとも無かりけん。偶一二の名人あるも世の中一般の文學は更に進歩の勢なかりしなり。

こゝに經信の子に俊頼と云ふ人あり、古今集の糟粕を甘しとせず、頗新奇の體を出だせり。俊頼是れを以て謗りを得ることもありしが、藤原俊成は大に之を賛成し、漸一世を動かすに至れり。俊成は上東門院の父なる道長公の四世の孫なり、頼朝征夷將軍となりし頃は當世和歌の長老にして、後鳥羽院の御師範なりき。

又や見ん　交野の御野の櫻狩り
　花の雪散る春の曙

など云へる華麗の體は漸其の子及び門人に傳はりて益進歩するに至れり。俊成の子には定家及び越部禪尼あり、門人には家隆、雅經等あり、定家は百人一集を撰びて、其の名兒女の耳に在り。家隆は定家に並びて當時の名人たり、其の秀逸數ふるに遑あらず。越部禪尼は女丈夫の氣象あり、武家の專横、王室の衰微を歎きて時々歌文の上に發せり。此頃歌に長ぜる婦人頗る多かりしが、此の禪尼の歌は尤意味深長なりとす後鳥羽院の宮女宮内卿の歌こそ、打ち付けに、アナ面白と見ゆれ。其の湖上花を詠める歌

花さそふ　比良の山風吹きにけり
　漕ぎ行く船の跡見ゆるまで

又春の歌とて、

薄く濃き　野邊の緑の若草に
　跡まで見ゆる雪のむら消え

其の他後鳥羽院の

三芳野の　高嶺の櫻散りにけり
　嵐も白き春の曙

の類なり。

雅經の

尋ね來て　花に暮らせる木の間より
　待つとしも無き山の端の月

等皆以て當時の歌風を見るに足れり。西行法師も亦此の時代の名人なるが唯飾らず繕はざるを以て他人に異なりとす。其の伊勢神宮を拜する歌

何事の　おはしますかは知らねども
　忝さに涙こぼるゝ

など尤眞面目なりとす。

きり〳〵す　夜寒に秋のなるまゝに

弱るか聲の遠ざかり行く

の如きは猶當時の風調を失はざる者とす

是れ謂はゆる新古今集の時代にして、「華麗、流暢豪爽、新奇、和歌最盛りなるの時」と或る人の云へるも過言にあらじ。然れども是れ唯短歌の上にありて長歌和文の上に及ばず。新古今集の序の如きは貫之の糟粕のみ。長歌は古今集以後一の見るべきなし、後數百年、古學者の出づるに至り長歌漸又盛んなり。

東洋の人癖として、一人の豪傑出づる時は後人皆其の流風に遵ひ其範圍を出づるを敢てせず。されば是れより後天下の歌人皆定家を宗とし、僅かに新古今時代の中なる一體を摸するのみ

定家の曾孫爲兼は豪傑の士なり。爲兼北條氏を滅する陰謀に預かり、事覺れて佐渡に流されき。其の護送せらるゝ時、日野資朝卿まだ稚かりしが、之を見て「アナ、羨まし。」と云はれしとぞ。爲兼父祖の範圍を出で丶別に新奇を出さんとせしも、姿詞を修めざりければ世の好みに叶はず、流行久しからずして止みぬ、謂はゆる玉葉風雅の時代なり。

是れより後二百年の間は南北朝或は足利氏の乱世にして文學上著しき、事も見えざりき。足利の末年に至り連歌と云ふ者世に行はる、即甲は上の句を咏じ、乙は下の句を付け、或は先づ下を賦して、後に上を連らぬる者なり。北條氏康、太田道灌、伊達政宗等有名の武將にして和歌を能くする者往々ありしが、敢て文學上に變化を起せしにあらず。

源氏物語以後こゝに至るまで和文の變遷を按ずるに唯盛衰記、太平記等二、三の書の觀るに足るべきのみ。盛衰記は北條氏執權の世に出來たり、作者は葉室大納言時長なりと云ふ、太平記は足利氏の初世に、玄惠法印の作りしと云ふ、或は南朝の諸將もろの一部分を編纂せりと云ふ。これより以前の歴史は大抵日記帖の類にして記事の要不要を選ばず然らざれば唯佳人才子の話しを記すに過ぎざりしが、盛衰記、太平記等に至りては世の變動を記すを目的とせし者なれば、これを眞の歴史の始めとも云ふべし。殊にこの二書は漢語を用ふると多かりければ、用語も廣く、隨ひて記事自由なりしが如し。

足利の世に於ては淨瑠璃物語あり、

心を留めて見給へば　主は淨瑠璃御前とて
藝能、情、見目貌、　當國他國に双びなし
双び無きこそ道理なれ　父は伏見の源中納言……」

など云ふ體にして、是れ淨瑠璃の元祖なるが、近世の淨瑠璃の文に比すれバ却りて耳に近く覺ゆるなり。

世の中の言語ハ常に變遷して止まざる者なるに、和歌ハ必古代の言語を以てしければ俗人の耳にハ漸々遠ざかりぬ。されバ徳川の太平に至り安樂の世界となりぬれど、和歌ハ唯貴人と學者の玩び者になりて世間一般の樂しむ所ハ連歌、淨瑠璃、流行節等なりき淨瑠璃流行節ハ余今之を說かず。連歌師の流れに狂歌師、俳諧師あり。狂歌ハ昔の落首に根ざし

信濃なる　木曾の御料に引かけて
唯一口に九郎義經

など云ふ滑稽より始まりて、遂に

杜鵑自由自在に聞く時ハ
酒屋へ三里、豆腐屋へ二里。

の如き尋常の風流を述ぶるに至れり。是れ却りて近體の和歌とも稱すべき者なり。狂歌に最名を得たるハ五十年前の人なるねぼけ先生なり。　其歌に

早蕨が　握り拳を振り上げて
山の横つらはる風ぞ吹く

俳諧ハ連歌より分かれ、徳川氏の時代に盛りなり。　農商の子弟に至るまで業務の餘暇之を玩ぶ者多かりき。　殆ど二百年前に芭蕉翁なる者ありて大に其の風を廣めて後世の詞宗たり。

初時雨猿も小簑を欲しげあり。
枯れ枝に烏の止まりけり秋の暮れ。

等の句あり。　其の門人に其角あり其句、

夕立ちや家を匝りて鶩啼く。
雪の日や船頭殿の顏の色。

豪爽誦すべし、又

夜神樂の鼻息白し、めんの中

寒夜の形狀寫し得て奇なり。　之を和歌に比べなバ、此の人ハ新古今集中の名人と云ふべし。

さても歌人ハ定家鄕の末流に束縛せられ、俳諧師ハ又唯芭蕉、其角等の範圍に局促せしかバ、古語を尋ぬる人更に無くなりぬ。　かゝりし程に歌集にハ萬葉集、歷史にハ古事記等の古書皆讀み誤まられ、解き誤まられ、古傳ハ滅びんとし古意ハ失せなん有樣なりき。　こゝに契沖阿闍梨なる者あり、堅固の道德を以て螢雪の功を積み萬葉集に於てハ殊に卓絶の見解を抱けり。　家康公の孫なる水戸中納言光圀卿方に大に

國學を興こさんとし、乃契冲を奬勵して萬葉の註解を著はさしめき。

此の時京都より一人の奇童あり。八歳の時父と共に稻荷山に鳥狩し

稻荷山　今日は小鳥のねを絶えて
　　　　音する物は谷川の水

と詠みたりし、是れなん荷田東麻呂にして、古書の研究契冲と相上下したり。東麻呂の門人に加茂眞淵あり、師傳を受け傳へて益古語を明かにせり。古體の文章及び長歌を作るは此の人に至りて始めて自在を極めしが、古雅に過ぎて耳遠き者多し。然れども其の短歌には

播磨潟　瀬戸の夕日の末晴れて
　　　　空より歸る沖の釣り船

等雅馴にして高尚の者亦多し。此傳統の學問を古學と云ふ其の門人等皆多少の功を奏せり。

眞淵の門人に本居宣長あり。古書の訓讀、古語の運用此の人に至りて大成せり。宣長和歌を得意とせず、然れども其學問老錬なるを以て萬葉、古今、新古今、歷代の體摸擬して眞に迫らさる無し。宣長先師の傳を受け尊王愛國を以て骨となし、文學を以て肉となし、師說を改刪辨駁して憚らず、門人を奬勵して異義を立つるに力めしむ。故に其學駁々として進步すること東洋には珍しき學風なりき。宣長の門人平田篤胤博覧強記一世を轟かししが、こゝに於て古學の進步一時休息せり。

古學者の作る所の歌文は皆古代の體にして當世普通の言にあらず。然れども古學者は善く歌文の紊乱を正し、天下後世をして假名文の法を知らしめたり。京傳、馬琴等の小說家より俳偕者流に至るまで其の恩澤を蒙らざるは無かりき。然のみならず歌人者流の苛細なる規則、學者の爲めに打ち破られければ、今まで和歌を敬して遠ざけたる俗人まで皆奮發して此の道に入り、殆俳偕を壓倒するに至りぬ。啻これのみならず、天下の人尊王愛國の大義を辨へ、王政の一新を助けて明治の日月を仰ぐに至りしは古學者の功績に多きに居ると云ふ。

（高等日本讀本）

柳櫻都錦繪　三幕目　大詰　立花家　かほる作

本舞臺一面の平舞臺上へよせて誂への冠木門これに續いて黒

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

板塀此内樹木の植込見越の松都て雪持つ道具根岸別荘表門体茲に巡査四人探偵三人立掛り居る此見得日覆大分に雪を降らし本釣鐘の送り雪下ろしにて道具止ると各四面を窺ひ門の中へことなし有つて互にさゝやきながら上下に忍んで這入る跡ばたく〳〵なり向より以前の正作一散にかけ來り花路にて

(正)ヤレ〳〵恐ろしいとだ早く皆樣に御知らせ申さう」ト舞臺に來り冠木門のくゞりから内に這入る此の時以前の專作下手より出て來り正作のあとからそつと内に這入ると此の道具廻る

本舞臺三間中足の二重家体本椽付き欄間の透し上手床の間違棚風雅の道具此の前庭の心にて植込み枝折戸など宜しく上手少し後へ下げて一間の中二階障子を立てきり都て別荘座敷の体にて二重ゑ立川芳雄花垣先太郎序幕の小六文金島田上品なる拵へ立川の妻花子にて控へ書置を讀んで居る雪下ろし少し早めたる合方にて道具止る

(先)此の書置による時ハ愚妻ハ必ず峯三奴を殺害したに相違ハムらぬ(芳)うか〳〵心付かざりしが箱屋ハ犬でムり升たか(先)いかにも本が巡査故怪しい奴と思ひしが殘らず密謀知られた上ハどーせ殺さにやならぬ奴愚妻に戀慕を幸ひに彼れが手に掛け殺したら返て吾等のもつけの幸ひ(花)そんなら彼方の御命も(先)人を殺さバ死刑ハ當然たとひ減刑あるとても最早世間に出られぬ身の上(芳)主義の爲め又我等の爲め一命捨る御志世ゑも稀なる列婦の龜鑑(花)とハ言へ妾や御悼わしーと泣き伏す先太郎芳雄も愁の思入れ奥より正作出て來り(正)へい旦那樣只今歸り升た(先)濟子ハ留守であつたか(正)へい未だ横網から御歸りにならないとのと故そんなら横網に往き御話を致し升やうと御厩橋まで參り升と彼の峯三が斬られて死んで居り升た(先)なにそりや峯三が死んで居たか……ウー」ト三人ハ顔見合せさてはと云ふ仕打(正)私やびつくり其儘あちらに往かずに歸ッて參り升た……(先)よし〳〵今横網の出先から手紙が來た故往かなくッても能かッたわい定めて汝もびつくりしたろー奥へ往つて休息しろ(正)へイ〳〵」と正作ハ奥に這入る花子ハわつと泣き伏し(花)一度ハどーか御目に斯りたく思ひ升たにモー協ひませぬか(先)此の書置にある如く直ちに自首を致したならことに依つたら情狀を酌量の上婦人故一命助かるともあらんが不便や孱弱ひ性質故苦役もさぞやと芳雄と顔見合しいや殊勝のことを致したわい」と愁をかくす

(芳)婦人の身にて夫を助け今迄盡す貞節ハ古今に類なき貞女と言わん花垣殿の御心中御察し申し升と」愁の仕打花子ハわッと泣き伏す先太郎ハ涙を拭ひ書置を仕舞ひ思入あつて(先)兼て申し談せし如く最早探偵十分に行き届いたる樣子なればもー茲にハ居られませぬ(芳)いかにも昨日あたりより怪しき奴の門前を徘徊なすものとなればこの宵をすかさず立退き升う(先)しからバ御令閨と共々に一先つ茲を少しも早く(芳)仰の如く立退けど御目にかゝるハ定めの場所へ先)拙者ハ後を片付けて直にこれから參り升す(芳)花子仕度しやれ(花)はい」と身仕度をする心にて芳雄花子ハ先太郎に會釋して奥に這入る先太郎ハ床の間の上の文庫の内より色々の書類を出し一とまとめにして奥に這入らうとする此の時花子芳雄ハ身仕度をして出で來り(芳)左樣ならこれより直に參り升す(先)どうぞ此の書類を御持ち下され(芳)かしこまり升た」と風呂敷に包み懐に入れる(花)左樣なれバ花垣樣(先)氣をつけて御出なされ」これにて二人ハ奥に這入る先太郎も同じく這入る跡下手よりこそ〳〵專作出で來り枝折戸を明けて内に入り二階ゑ思入れあつて奥へ忍んで這入る此の擬樣にて道具迴るともとの表門にて中から序

幕の秋田富三花子の手を引き傘を差し出て來る跡より芳雄りゝしき拵へにて出て來ると上下より探偵三人出で來り三人を取り巻き(三人)御用だ〳〵(芳)これハけしから拙者共ハ御用と云われる覺ハムらぬ」と花路の方に行きかゝる」それ」と三人ハ芳雄にかゝる芳雄ハさてハと云ふ思入れにて二人を投げ退け(芳)富三跡ハ構はず花子を連れて兼ての所へ(富)それでもこのまゝ(芳)はて心配にハ及ばぬわい」早く往けと心配してうろ〳〵する花子に目にて知らせる二人ハ往き兼る仕打(芳)ゑゝ往かぬか」と心急く思入れにてきつと云ふこれにて二人ハ思ひ切つて向に這入る跡見送つて芳雄ハ安心の思入れ探偵ハ烈しく掛る日覆よりすきまなく雪を降し雪をつかつて芳雄ハ手早き柔術の立迴り宜しくある上下より大勢の巡査出來り「御用だ〳〵」と大勢一所にかゝる門内にもがや〳〵人聲する芳雄ハびッくりすることあつて又大勢とはげしき立迴りとゞ一方を拔けて下手に逃げて這入る道具又もとの座敷となり二階に先太郎革包を持つて立掛り後ろから專作組み付き四方に巡査大勢取巻いて居る直にばた〳〵になり向より芳雄大勢を合手に立て迴りながら出來りて花垣君もうだめだ……露見した(先)殘

念至極(暮)なに」をと掛るをねぢ上げ(先)立川君御合圖ハ(芳)立ち退いた(先)さうかとふりはどいて掛る事作をつき廻す事作ハ草包を取らうとするとて先太郎ハ事作を二階より美事に投げる事作ハ「かばん」を持つたまゝどーと反ると本鐵砲どんと恐ろし音かばんの中の爆裂彈破裂せし心凄しき鳴物して家体二階仕掛けにてがら〳〵と崩れるどん〳〵火勢にてわや〳〵遠くから取巻く舞臺一面化學の器械にて黒煙りを出し火炎の所々より燃え上る仕掛け日覆よりすきまなく雪を降らし先太郎芳雄ハ大勢を裂しき立廻りあつて二人ハ大勢にねぢ倒さるゝ又起き返て花路の方に行かうとする向より大勢の巡査川で來るこれにて又舞臺に來り立廻り裂しくぞ疲れ果てゝどーとなる大勢より掛つて繩を掛ける此の模樣宜しく幕下ろしぜん〳〵にて

拍子幕

さてこれにて拙作正本も漸々に結局となり升た去年以來長ゝ〳〵と面白くもなき趣向御厭ひなく御覽被下冥加至極の儀と愛讀の令嬢淑女に深く御禮を申し升す又聊かゝ寓意のある所を御覧せられ御高評を願ひます

かをる述

批評

新編紫史第二編

紫史の第二編が誠之堂から發兌になりました。われ〳〵ハその第一編に於て大体の批評を試みましたが、この二編に至つてハ餘程滿足するところが有ります。即ち、第一編ほど原文を枉げる事が少なく、而も親易い漢語に古言を傍訓にし、一目の下字義が明らかになるやうになつた一條、これハわれらも至極の賛成を表するところです。

立志美談

原書ハ佛人の著、翻譯ハ今泉啓三郎氏、誠之堂の發兌。題辞と序跋とで威した處ハ不感心の至りですが、譯文ハ中々巧みなものです。つら〳〵思へバ譯文の晦澁不安を極めたのハ實に二三年の昔となりました。この頃の譯書ハ一体に譯し方が上手になつたのハ、その原因の一として西洋風の語法が多少日本人に耳馴れて來たためと言ひ、また思軒居士などの力も與つて多きに居ることでした。この書の如き、まづ讀かゝつて文の流暢にハ早く目がつくほどです。經營の勞實に宜しく御察し申します。

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

主に自傳を要とし、筆の足りぬをわづかに著者が補つてあるのハ鼓動を深くする第一の手段、原著者の注意實に感心しました。　中の三人の神童の様子ハさながら目で見るやうで誰でも一讀の價ハあります。　小學校中學校などの賞與本などにハ尤も宜しいものでしやう。

不知識主人の文學通を細評する心得のところ都合により次號へゆづりました。

雜纂

流行に付て

久平老人

小兒ハハデを好み、大人ハジミを愛す。小兒の嗜好を顯ハすや必まづ赤き物に於てし、稍長じて紫等の色に及び遂に鼠色、茶色等の中に就て神經を刺擊する最も少なき者を撰び、之をジミと云ひ、コウトウと稱して以て嗜好の極とせり。田舍者と都人の嗜好も大むね之に似たり。

獨り長幼都鄙の然るのみならず、古代の嗜好と近代の嗜好亦かくの如し。掛巻ハ畏こけれど出雲の神様が與様のチンチンに堪へ兼ねて「一寸出るから着物を出せ」など宜ひし時ハ「山畠に蒔し茜搗き染摺汁に染衣」こそ萬にまして美ハしき者なりしが。其の後、紫を尊む世となりて紫ハ緋の上に位したるが、後に黒裝束と替ハりて「紫ハ移ろふ物ぞ橡の……」など澄まし込むに至りぬ。遂に我れ等が時代に至りて彼の四十八茶、百鼠に思ひ思ひの嗜好を寄せ、其の數枚擧に遑あらざるに至れり。唯吾が國のみならず、東西の諸國嘗て紅、紫を珍重せし跡歴々として史上に明かなりとか。國民の成長するハ一人の成長する順序に同じと或る西洋家先生の噺されしハ是れ等の事ならん。

色の好みのみならず、色の取り合せ方の好みも亦時代によりて違ひあり。古ハ色のハデなるに隨ひ取合せも亦ハデならざるべからず。赤と緑などハ取合せの最も美しき者にして、赤と白、緑と白などハ最もおとなしき者なりしが如し。かかる目覺しき取合せハ今ハ唯粗大の場所、古風の裝飾に用ひらるるのみ尋常の衣服などにハ殆ど其の跡を絶てり。婦人の襟の色ハ其の一例なり。昔し新造に赤き襟、年増に茶色の襟などの流行りしハ是れ裏衣の色と相違からんことを求めてなり、今ハ此の風絶え果てて、僅に或る古風なる地方に存するのみ、上等の染衣にハ同じ色の襟を常とする程になれり。或る名優が

舞臺の衣裳に黒地に黒繡ひ白地に白繡ひを用ひしなど（舞臺の衣裳としてハ）實に通り過ぎたりと思ふ計りになれり。

世の好みのかくシミに移り行く理窟ハ誠に知り易し。古へは人の着目精密ならざる故、過大の刺撃にあらざれバ目を驚かし、心を慰むるに足らざりしを、目の漸進歩するまゝに、最小の區域に於て最大の巧みを弄し、最小の激動を以て最大の愉快を買ハんとするに至るハ巧思妙技の自然なり。古への美ハ今の美に同じ、唯彼れハ粗大にして是ハ精微なるのみ。

目に訴ふる物然るのみならず、音樂ハ長短、鋭鈍、毫髮の差に其の巧拙を爭ひ、香の配合ハ厘毛の過不及に其の好尙を表す、皆是れ感覺の進歩に頼れり。專ら心に訴ふるもの亦然り。

源氏物語の最も及び難き所ハ大凡常時の尋常有り觸れたる人物に就きて細かに變化を盡くしたる處に在り。西洋のシエクスピアと云ふ作者ハ相似たる中に於て變化を顯ハすに巧みなりし人とかや。余ハ西洋字を讀み得ずと雖、之を以て其の名匠なるを知れり。然るに近來の大博士、大學者にして「源氏物語ハ各異の變化に乏し」とて貶しむる者往往あり。何ぞ其の心目の野鄙然たるや。是の聲時としてハ人に向てシエクスピアを談ずる事あり他人の事ながら顔から火の出る樣にぞ覺ゆる。

話し思ハずも脇へそれたれバさらバ本題に立ち返らん。余ハ隱居にて久しく世に交らねバ、今ハシミ、コウトの世なりとのみ思ひたりしに、去年以來いらつめの流行欄内をも見れバ思ひの外の事ぞ多かる。數へ立てんもうるさし、一口に源氏物語の語を借りて評せんに、「花やかに、あな、清げとハ見えながらなまめかしう見えたる方の交らぬ」ぞあやしきや。初め余之を信ぜず再三にして之を疑ひ、丁度或る大なる呉服店の手代に相識有し故、之を質問せしに、手代曰ハく「然り、當時ハ一体ハデの物のみ流行り申す」と。そも流行ハ一時偶然の者あり隨分根深き者あり、今や此流行ハ隨分根深き者の中に在るが如し。

流行ハ多く藝人社會に初まる（咄しの浮氣商賣に渉るを許し給へ、これ西洋にも同じ事なりとか聞く）。然るに明治の世ハお國武士の世なり、堂堂たる男子すらチヨルカスりの羽織を着て以て種族の貴きを摸擬ハんとす、何ぞ況や藝人をや。遂に「神田のイサミ」を屈し、「深川の婀娜」を抛ち、其の化粧りをデコデコにして以て彼の幼稚なる神經を慰めんとするに至れり。然のみならず、一方にハ又一種の婦人ありて世の尊敬を受けたり、此の種の婦人の中にハ嘗て「玉川の水に晒せし」垢脱けたる人なきにあらず。奈何せん其の最愛なる良人

既にお國武士ある時ハ己むを得ず其の好尚を枉げて以て良人の愛を固め、一ハ以て寄る年波を隱さざるべからぞ。一方にハ藝人、一方にハ此の種の婦人。恰も滊船に帆を揚げたる如く、後押しに綱引さを付けたるが如く、ハデの流行する早達郵便を置きて以て命を傳ふるより速かなり。己んぬるかなお國武士の武運盡くるを待たんか、抑亦彼の耳目の進歩するを待たんか。さりとてハ随分氣の長き咄しなり。久平老いたり、復た意氣でコウトウなる婦人を要せず、唯怕る孫共がデコデコ作りのおかみさんと結婚するを見んことを。

日耳曼國音樂の大家「モザート」氏の傳　（つゞき）

夢の家口述　みさ子筆記

千七百六十三年七月即「モザート」が七歳の時ゟの一家族ハ諸國遊歴の目的にて日耳曼を出立いたしました。此時「モザート」の名ハ既に歐州各國に隱れなく到る處皆有名なる少年音樂家の來れるを歡び迎へました。七月故鄕を出立してより十一月に至り佛蘭西の巴黎府ゑ到着いたし佛王の召に應しヴェルサイユ王宮に參内いたしました。此王宮にハ奏樂堂ありて美麗なる風琴の備付がありましたから王ハ「モザート」の來遊を幸ひ其風琴を彈ぜしめんとて召れたのです。當日ハ數多の伸士列座の中をも憶する色なく美事に奏しましたれバ一座の人々歎賞せぬものとて無かつたとの事です。此時其姉も共に參内して彈しましたが何れも幼少なるに其道に堪能なる爲め大に他人より羨れました。又「モザート」の名を稔聞せし人々ハ「モザート」の肖像を刻まんことを申出し「モザート」ハ之を承諾いたしましたれバ肖像ハ「カルモンテル」の手に成り中央にハ父の像を刻し左右ヨ「モザート」と姉の像を刻しました

巴黎逗留中「モザート」ハ二曲を作りましたが大に佛人の意に適したるが爲其名忽ち四方に傳播いたしました。然るに此曲に付きてハ少し說ありて此曲ハ「モザート」の作なるべけれど其父の手を入れたるものなり抔と評判いたしました。是ハ畢竟非常に巧なものですから小兒の迚も作れるものでないと思つたから斯樣にいひふらしたのでしやう。

翌千七百六十四年にこの一家族ハ巴黎府を後にして英國に渡りましたが此地ヌても仝じく朝野の感賞を受け双姉と共に兼て巧なる「ハーピスコート」にて會話樣の「コンチェルト」を催しました。又[illegible]此道に名高い「バハ」「ホンデル」の作に係る甚困難なる曲を出して其能を試みられたことがありますが何時

も難なく彈じますから一層人を感動させました。龍動府逗留中王宮に召されし時の如きは「ベース」のみにて「メロヂー」のなき物を以て彈ずることを命ぜられました。是等の曲を彈ずるは甚だ難きものなるに「モザート」は彈じながら和聲を付して巧なる曲を作りました。是時「モザート」はまだ八歳の小兒「クリスチアン、バハ」といふ人の膝に腰打かけて彈じたと申すとですから身体の小さかつたとが分ります。英國逗留中の多くの奇行は「デインバリンダトン」の著し、樂理雜誌に記載してありますから委しきとは其にて御覽なさい。「モザート」在英中「ソナタ」といへる曲（合奏曲の一種）を六曲作り之を英王の上覽に入れました。此曲は龍動にて印刷して廣配布し大に好評を博しました。

千七百六十五年再び佛國に歸着し須臾此地に止まり巴黎其他の地にて屢彈じましたが間もなく方角かへて和蘭に行き其首府なる「ヘーグ」にて「シンホニー」を奏しました是は立太子式の祝に作りたる者にて「フル、オーケストラ」即完全なる管絃合奏曲です。間もなく氏も姉も大病に罹り永く此地に止まることを得ずして巴黎に歸り二ケ月間程養生をなし快復して再び「ミユーニツク」に歸りました。此地の領主は前にも申しゝ如く「モザート」を甚だ愛して居りましたから其歸着したるを聞き直ちに召して一曲を作れとの所望によりて其目前にて直に作りて之を差出しましたが此所には新作の曲を彈じ試むる樂器が無いものですから意中にて案じ出したるものを其儘差出したのです。其後樂器を得て試みましたるに中々の出來でしたから領主も大に感ぜられ全く諸國を遊歷したるを以て一層其藝の上達したるものとて大に賞せられました。千七百六十六年の暮に生國なる「サルスボルグ」に歸りてより後は專ら精神を作曲にのみ凝しました文章を作るには名人鉅匠の文を多く讀まざればよき文章の出來ないと同じとて曲を作るにも矢張種々名人の作曲を見なければなりませんから「モザート」も「エンマニユール、バハ」「ハンデル」「ヘッシイ」等の大家の作曲を廣く研究し後二年間は專ら作曲にのみ思を凝しました。

千七百六十八年姉と共に澳地利の維威府に赴き皇帝「ジヨセフ」第二世に拜謁し所望により「ラ、フインタ、センプリス」といへる曲を作りました。これは「オペラ、バフア」（一種の滑稽曲）の一種にて「メロヂー」のみありて十分なる樂譜なきもの故「ピアノ」等にては彈ざると協はざりしを「メタスタシヲ」「ヘッシイ」等音樂の大家は此曲を大に愛し完全なる譜のあらざるを殘念に思ひ其譜を作ることを思ひ立ちました。

正誤　前號に「パーピスコード」とありしは「ハーピスコード」の誤又「シヤタトチル」とありしは「シヤクトル」の誤

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

千鳥

立花家主人著

上

憐れト云ふ憐れ悲みト云ふ悲、盡く集ッまつたハ此家ムシロ小屋です崩れた壁から吹き入る山風破れた家根から灑ぎ來る時雨…賤の伏家…不破の板庇ナド、歌人の優言葉や小說家の巧みな形容にきく時にハドウカ住居つて見度いなどゝ世を茶にした假風雅人も有り升ふが實際ハ中々……

散り積つた落葉をガサ〳〵踏みしめ寒むさうナ泣き出しさうナ…頰ペタを眞赤にしてヒヨロ〳〵『御父チヤン〳〵』と云ひながら歸つて來た六ッか七ッ位ノ小兒此ノ寒天につゞれの單衣一枚然も荒布ノ樣ナ…着るト云ふハ名のみです…頭の髮ハ蛛の巣の樣になり冠ッて…男子だか女子だか一寸見てハ知れません父の小川末吉モ同じつゞれに髮も鬚モ延び瘠せ衰へ丸で病人…無理でハ有り升せん末吉ハ六年前に不幸と難儀の重つて身上を仕舞ひ…今ハ果敢ない日雇に湯なり粥なり啜つて居たにツイ二十日許り前…苦樂を共にした女房ハ生れて一歲になる赤子を殘して死にました…男の手一ッに萬事手の掛る赤子夫れに種々の苦勞…日雇にハ出られません出ぬ故無論湯も粥も…可憐ろうに『ヒイ〳〵』泣き立る赤子を冷い肌に入れ「阿花ヤ……」解り升たか小兒ハ女です…「ドーダ…今日ハなにか御貰が有ッたかチ」トしわ枯れた問ひ「マー斯樣に有ッたヨ」袂から紙に包んだ白團子と小錢が八厘之を父の前に出し『御父チヤン寒いから何時も行く家許り廻ッて來タカラ…御錢ハコレダケ……夫れから御母チヤンの御墓へ行ッて…泣いて居たら』早シク〳〵泣き出し升タ『坊樣が…來て…御團子を呉れた………御父チヤン食べなヨ赤子ニモ……』親子ハとの團子を喰ひ地爐の自在に掛けてある土瓶の冷めきッた湯を飲んで…僅かに…餓を…無殘末吉の目からポロリ〳〵湧返る熱涙…この涙の源ハ外でハ有りません只『不愍』と云へる二字！毎日昔から憐れのものゝ數へらるゝ男の乳貰ひ…其の乳貰に出たときに他の六七歲の小兒のサッパリト（美麗でなくとも）着物ハ着て學校に行くを見てもアー阿花……乳の澤山あつて溫かい着物を着て居る赤子アー此の赤子…のぞ感情、ハ最初より無いでハなけれども浮びません…ナゼ！此の人の境界でハ日輪に礫到底出來ないとあきらめて居り升す只他の小兒の「飯事」「姉樣」の遊にも阿花ハ乞食だと雜て與れぬのみかイヂメられて…時としてハ打たゝかれ…悔しそうに泣て歸る度に末吉の胸の張り裂くやうです夫れも今ハ慣れるやうに最

初程にハ…然も毎日只不意に…偶然…自然に…見るにつけ聞くにつけ先き立つものハ涙…嗚呼涙…これが實に親子自然の情愛の切ない處言はれ言はれぬ所であり升す

阿花ハ團子を食べてから足を投げだして地爐の側よコクリ〳〵と居眠を始てゐたが…仕舞ハコロリと寢た其姿…寒からふと思へどかけてやる物ハ皆質り盡して一ツもありません又涙赤子ハ佛様乳を欲しがッて「ヒイ〳〵」と泣き立て聲も切ない様子「チー、、、」とイタブリながら團子をかき碎いて茶碗の水を交ぜて口うつしに呑ませても…中々泣く聲ハ止ミマセン夫れも野末にすだく蟲…「ヒー〳〵ー」と霜に弱る音ハ末吉の腸をす斷〳〵にきりさいなみます「マー何様したらよからう」不思「ハアーー」と歎息……

隨分近邊にも慈善者のあつて毎日色々惠んで呉れるそれを賴みに親子三人ハ命ハつないだ然し昨日カラハ貰物ハ何にもなく…末吉ハ絶食です「男一人前でありながら意氣地のないドーしても食ふ位ハ」とハ何の苦勞なく生れた世間知らずの言ふことで赤貧洗ふが如く僅かの日雇で一家四人が生活して居たに女房の病氣定めて濟婦湯の一帖位ハ飮せたでしやう女房の死去にこれも物入り其後ハ脾弱い赤子と頑是ない小兒ドーして稼ぎが出來ませうその上にまた自分の病氣人生の不幸と薄命の極度露の命ハ賴み少くなり次第に細そる玉緒もきれかゝッて近よるものハ餓死より外ハありません嗚呼これが東京なら新聞よ出て慈善者の惠み金又ハ養育院育兒院も…寒村僻地の悲しさソンナものハありません暫時ボーとして考へたが漸に思ひついた……

「サウダ近所に居ても平常から中悪る故に行かなかッた女房の兄の家彼所に行ッてドーカ此の赤子を引き取ッて貰ひ一生懸命稼いだら」と漸と決心しました「阿花ヤ〳〵〳〵」起されて目をこすりながら」ナンダへ御父チヤン」「これから御父チヤンと一所お伯父チヤンの所へ行くのだよ」「イヤダ〳〵こわいもの「こわいとハない」誑々承知した阿花の手を取り赤子を懐に入れて心細くもシヨンボリ家を出たハ丁度薄暮朝より雪催故時々ウットーシー雲の間から下界を照す太陽の薄い光も名殘なく西に傾いて枯木の高い枝にさらされて居た烏もサッと吹き拂ふ嵐に飛されて一羽二羽寒むそうに塒に歸ります…冬の夕ハ秋の夕より一層淒しいものです

＊　＊　＊　＊　＊　＊

下

仇に首を下げて憐を乞ふハ誰も良くてせぬものそれ程でもないが平生から如何なる理由か中の悪い女房の實家にも今ハ「親ハなきより」赤子の引取り方を頼まうと忍び難きを忍び病苦と飢餓を凌ぎ喘ぎ〳〵行く路にも

「定めて兄キに生氣地なしといはれやう」「なしと言ハれても」「たとひたゝかれても」「此の兒の爲めなら」色々と考へながら漸く行ッて見れバ……

家ハ閉ッて誰も居らぬ様子不審と近隣で聞いたら負債の爲めに四五日前に家出の儘歸らぬとのよ……廣い世界に捨られた末吉イヤ〳〵ながら頼に思ふ其の縄ハ切れました落膽失望其の時の有様ハムシロ形容の出來ないと言が異事の形容でしやう餓ゑ泣く赤子と寒さに凍へる阿花をなだめすかし彼の八厘の中文久二ッにて焼芋を買ひそれを食べさせ手に握らせ…海邊まで來ました…最早午後九時頃です何處の鐘の音も凍ッて聞えません土地も氷りきッ凸凹が親子の草履を突きますし見渡せバ海の荒れた故か大船ハ一もありませんが一葦に生計をよせる漁夫の船が所々にモヤッてボンヤリ篝を焚き夫れに苫の裡で愁しろうに哀れ咲く何よか歌ッて居ります…凄ましいハ岩に碎くる濤…漁歌濤聲皆斷腸の鳴物です海面より吹き拂ッて來る風ハ親子をたゝく様に裂しく其の寒さハ骨をきり肉と裂きます—「御父チヤン寒いヨー」ト縮まッて泣き出す懐の赤子ハ泣きゝッてモー聲も出ません末吉ハ何にも言ハず恍惚と二三歩ハ行いたが此の二三歩の間に世に淺ましい悲しい決心をしました

「モー斯様なッてハ親子が死ぬより外ハない…己れが死ねバ殘ッた二人ハキット死ぬ稼の出來ないハ此の赤子がある故…生れついての病身とても育つ見込もない此赤子がなけれバ阿花ハモー六ッ故…二人で命ハつなげる可憐ろうだが赤子を捨てるより外ハない…しかしこゝに捨てゝハ拾人ハなく…寒空に死ぬだらう…夫れよりハ一層一思ひに二人の命を保つ爲めに赤子を殺さうと

云ふ恐ろしい發意も實よ餘義なき次第「大の蟲を殺して少」とか「毒を食ハゞ皿まで」とか古來よりの悪い諺も幾分か末吉の決斷を催しました折から雪の魁　霰がポッ〳〵降ッて來ました

末吉ハ知覺も精神も亂れません此の決心に至るまでの心根ハドーでしやう千萬無量の思を斷つて突然懐　の赤子を逆捲く

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

浪に投け入れました末吉ハ阿花と共にタヂ／＼と沙に轉びました…無殘ドート退く浪ハ赤子を包んで…アヽ姿も影も見えません…只其のトタンサット騷ぎ立ッたハ千鳥ばかりです—泣き立ッたハ千鳥です……

末吉ハ其塲から阿花と共に家に歸ッたが良心が咎めてドーして居られません明る日直に巡査駐在所へ殘らず白狀しました其後重罪の公判に於て十分の酌量減刑のあッて輕い罪科に定まりました……

これハ末吉が公判庭の憐れな陳述を其の儘筆記して美妙兄の眞似を致した實説です

文藝美術

第三回懸賞文藝應募得點の分

甲題　わかみどり

乙題　笑顔

右二題の中乙の方ハ題が六ツかしかつた故か、意外に應募者が少なくでございました。　就てまた右二題に應募の諸作ハいづれも一節の有るもので、このたび優等賞を得たものゝ少ないのも決して今までに比してわるい作が多かつたといふ譯でもありません。　たゞ是から撰をきびしくしたためで、それ故一等賞か二等賞を得ぬものハすべて雜としてあハせて掲げ、それらの作者よりハ當號のいらつめを一部づゝさしあげます。

わかみどり

●俳句の分

御茶のみのこやすみながし、わかみどり。　旭照雄（ナゴヤ）
おきかへて日もへぬつちにわかみどり。　錦貫よし（ナゴヤ）
野のくぼみ、水うちふくむわかみどり。　二葉ちよ（ナゴヤ）
たけの戸や更けゆくはるのわかみどり。　櫻井はな（ナゴヤ）
はなもよし、されどやなぎのわかみどり。　鈴木たけ（アキタ）
たふげから里のけしきやわかみどり。　關根小三郎（トチギ）
鶴のすむちとせのまつやわかみどり。　吉田篤子（不詳）

右　いらつめ一部進呈の分

●和歌の分

さくらいろの　ころもを　ぬぎて　きのふ　けふ
みどり　よろはふ　みよしのゝ　やま。
川村爲中（トウケイ）

いけのもに　うつる　きぐさの　わかみどり
そらや　くもると　みる　べかり　ける。矢澤惟義（ナガノ）

野も　やまも　おなじ　みどりよ　なりに　けり、
いづれ　さくらの　こずへ　なる　らむ。堀内鶴雄（セイ）

わさなく　みつえ　さしそふ　わかもみぢ
かせ　やどる　べく　なりに　ける　かな。横山頁至（カヒヤ）

ふる　あめの　そゝぎハ　すれど　中々に
みどり　いろ　ろふ　夏こだち　かな。横山ひろ（上岡）

右　いらつめ一部進呈の分

なつやまの　わをばや　底に　うつるらむ、
みどりも　ふかき　たにがハの　みづ。中村てい（ノナ）

風　さそふ　心づくしも　なつやまの
わをば　すゞしき　ゆふぐれの　ころ。山村こま代（ノナ）

右　いらつめ半ヶ年間進呈の分

●文章の分

昨日（きのふ）まで白雲（しらくも）をわかせた梢、今日ハ若葉にしげる枝、浮世のかハり易いにハ驚かれます。そよと吹く風、何となく薄青い色のやうに見ヘ、すゞしさも一倍まさるやうで――片岡の好むかつほに椎まかばとのふるごとも思ひ出され、夏かげと頼みし椎とのよみうたも胸にうかびて落る實ひらふ冬のことはいざ知らず、夏のこかげがたゞなつかしく見ヘます。ましてや時雨の名殘の露にぬれ、色を増したろの風情、筆や言葉で盡されましやうか。

堀内鶴雄（セイ）

右いらつめ一部進呈の分

笑（ゑ）顔（がほ）

●俳句の分

見る方へゑがほのうつるひゝなかな。　太田よし（ノナ）

來（く）る人をゑがほでうける禮者（れいしや）かあ。　宮嶋まつ代（ノナ）

ほたる火に見初めし人のゑがほかな。　かけやま（ナトワ）

ひるねする稚兒（ちご）守る人もゑがほかな　仝　上（仝）

蓬莱にはひかゝる子（こ）の笑（ゑ）がほかな。　園田鎌（オノン）

右いらつめ一部進呈の分

子にはたるとらせてはゝのゑがほかかな。　太田なか（ナガノ）

右いらつめ半ケ年進呈の分

● 和歌の分

うきよとは　さとりながらも　中々に
ゑがほの　中に　やいば　ありとは。　和田てる（フクチカ）

愛らしう、をさなき　目にも　見知らなむ、
手まくら　なせる　たらちめの　おも。司馬あや（トウケイ）

うれしさの　何は　あれども　みどり子の
ほゝゑみ　そめし　おもわ　なり　けり。小鈴山人（トウケイ）

ともし火の　花の　影さへ　にほひ　けり、
ゑむや　をとめの　よはの　けはひに。中村ひさを（ナガノ）

右いらつめ一部進呈の分

● 文章の分

「見わたせば、青やなぎ、花ざくら、こきまぜて……」　あ

あうるはしき花の眺め、これが花の笑顔か――笑顔。　いかに此ゑがほを見て喜ばぬものやある。　二つ三つのおどなき子供のあら愛らしさ、にッことして、つくりは飾らず、されどいと深き笑靨をあらはれしゝ笑顔。　いかにこの笑顔を見て愛でくつがへらぬものやある。　胸に手を當てとつおいつ、顔色青ざめたるほどの愁の快然と打開きたる時、覺えず見する笑顔。　心にかたく結ぼれたる難題の一時に解けし時、はたと手を打ちて思はず出だす笑顔。　いかにこの笑顔を見て――もし喜びを共にせぬごとき無情の男子の世にありせば――げにも鐵腸は温柔の水を容れず、さるが如きは疾く死ねかし。比ふれば笑顔は晴れたる雲なり、おのづから晴れし空なり。風は鷲の羽を動かすに足らず、葦をさゝやかしむるに足らぞ、わづかに毛彫を水に刻むばかり、おのづから澄亘れる空に自然の「靜寂」を寓したる、かくてこそ「水や空、空や水」宇宙ほゝゑむところ言ふべけれ、笑顔つくるとこそ言ふべけれ。　あだ嵐ねたくも雲を引き千切りて月をわづかに覗かせたるころの月に笑顔ありや、ろも。　意もて述へなば或は然りとも見ゆべけれ、公平よ之を見なばそも如何。　之を強ひたるは假なり、おのづからなるは實なり。　妾はかゝる類の笑

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

顔を好まず。天則にもとりし笑顔ハ妾のいたく賤しむところなり。まして漢文に聞れし褒似の笑顔、またハ求むるところありて、しかも、わざと造りし笑顔なんどハ…

右　いらつめ半年分進呈の分　吉岡こゆき(ホフ)

右の外仙台の廣西復三といふ人から贈られた文章もありましたが、期日に後れたため審査外とし、それだけハ次號へ出します。

第四回懸賞歌「ほたるがり」の應募得點の分ハ次號に出します。

第五回懸賞文藝新題

うはり香

右の題で述べるべき趣意ハ親しくして居た人の亡くなつたのを悲むのです。

作ハ、歌物ならバ、

俳句でも、和歌でも、今様でも、唱哥でもよし。

文章ならば、

どの文体でもさしつかへなし

但しいづれも狂体、滑稽体、不道徳な類を忌むこと。

原稿ハ廿七字づめで、字体を明了に書くこと。

原稿ハ狀袋と本紙とに双方とも宿所姓名を記すこと

以上の制規に從ハぬものハ悉く沒書。

〆きりハ八月十五日

通信問答

通信問答の儀、續け御問ひ合ハせになるのハ洵に有難いことですが、中よハわづか前のいらつめに出た事を更に御たづねになる方もあり、他の讀者の御迷惑も少からず、因ッて今度から規律を定め、御問ひ合せになッた時より前六號までの間に出て居た箇條にハくはしい御答へを爲ぞ、只その在處を言ふこととよ定めました。尤もその以前よ屬する分ハ更にくハしく言ふのハ無論の事です。大方のいらつめの方々、その御つもりに願ひます。

藤田秀子さまへ　陶器製造に關する一切の事を御尋ね、それ故その道の人に聞いて見ましたが、如何にも藥が面倒ゆゑわづかの處では言ひ盡くされぬそのこと故、殘念ながら御答へをしません

正修漁史さまへ　(一)藤尾錄郎氏の家計簿記學(博聞社出版)が自宅獨修に宜しいです。(二)吉岡商店の發兌の平算敎科書は宜しい書物です。

長門迂婦　(一)仙臺平へついた油垢はやはり石鹸で洗ッただけで宜しいです。(二)虫歯にウロが有るため痛むのにはケレオソー液を一寸つけるが宜いです。(三)黑胡麻一合、蒜の根一合、鰹の肉一合、味噌一合、右の四品を鍋に入れ、火にかけてとろ〳〵と煮詰め、毎日持藥にすると乾度咳はとまります。　加琲のサジに二杯ぐらゐづゝ日に三度內服するのです。(四)男羽織の紋はその人の特別の好みの外、今は小形なのが流行します。　但し影紋ははやりません。　物は矢張り上等は絽です。　スキヤは下等の方です。　色は黑と紺との二つが重なものです。(五)玉子は仰のとほり一日二ッぐらゐ食べるのが宜しいです。生か、あるひは湯よしてならば身体に害をば爲しません。(六)額の生際を濃くするには枳殼と眞菰とを用ゐるのだといらつめ第十八號に書いて置きました。硼砂は毛を洗ふのに用ゐるのです

高橋ろく子さまへ　大聲で物を言ふとき咽喉の痛くなるのを防ぐにはレーフル、即ち肝油を持藥にするのが宜しいです。

岩崎八重子さまへ　(一)髮の毛を柔にするは第一、つまらぬ油を塗らぬ、第二、左の油を用ゐること、この二條です、その塗ッていゝ油といふは、橄欖油一オンスの中へ蜜蝋を豆の大きさぐらゐ解かしこみ、それへ一二滴薔薇油を落としたものでこれはいらつめ第十三號に出て居ました、(二)石油のあまり減らぬやうにする法は知りません

兵庫無敵育娘さまへ　(一)いらつめ第十八號の額の生際を濃くする處方非常に有効との御手紙、忝くこゝに廣く披露します。　(二)最上の枕は空氣枕ですが、結髮には不適當です。今の處結髮のためには衞生に適當の枕は有りません(三)片鬢は大抵その頭のかたむく方を特に高くして置くと直ります。(四)クリーバーの石鹸を東京芝濱松町一丁目西洋小間物商江澤方で賣ッて居ます。之と同樣、むしろ優ッた石鹸はコルゲート商會のカシミーヤ、ブケーといふ石鹸で、一個

六十五錢ほどです。　化粧石鹸の最上です。(五)石鹸や硼砂を用ゐた後で糠を用ゐても害ハ有りません。(六)板についた蛆を去る法ハ知りません。(一)飯粒へ白砂糖をすこしまぜ、よく煉り、それで接ぐとランプのホヤが接げるといふ事を常盤女といふ方から御知らせになりましたが、是ハ大抵の陶器をつぐのに適當します。　たゞし、極めて厚いものを接ぐのにハそれ程よく有りません。

みどりさまへ　(一)「かうろぎ」を「キリギリス」と呼ぶのです、(二)花オモダカも澤瀉でよろしいです。(三)前號の琴水女史への答にある「テルコール」ハ全く活字の誤植で「アルコール」です。　校正の疎漏ハ幾重にも御ゆるしを願ひます。　また右化粧ぐすりハ日に幾度顔へ塗ッても宜しいです(四)溶液でまた利きませんでしたなら白緑青を粉にして胡臭の處へつけて御覽なさい。　かならず利きます。(五)アザを拔くにちと面倒ですが、左の法ハ効が有ります。　盛暑の頃日あたりのいゝ處に生へた韮を取り、黒焼にし、石灰と砥石、いづれも黒焼と等分にして、黒焼に加へ、餅米を黒焼の半分ほど入れ、夏の日に乾し、冬ハ竈の側に置き、やがて經つ内に米ハとろける、これで藥ハ出來たのです。　是から竹箆のもッとも薄いのでアザの上を破り、血を出し、その上に右の藥をよく塗り、半紙で包んで置くのです、　やがてアザハ取れます。

蘋水女史さまへ　皮膚の毛を殘らず除き去るのハさした事實もありますまいが、決していゝ事ハ有りません。　また電氣て焼き切りでもするなら知らぬ事、取り盡くす事は覺束無い事でしやう。

日本橋加壽讓さまへ　(一)口中腫や荒ハ大抵、リスリンを塗ると直るものです。(二)食客の別名「居候」ハ「人の家に居り候」といふ義です。

隅田川櫻水女史さまへ　洵に御氣の毒の至り、どうぞ前のみどりさまへの答の第三を御覽下さい。

大山たか子さまへ　青白い顔を黒くする法ハ知りません

城山雅子さまへ　(一)髮の毛へわるい油をつけるのハ大毒です。　全く付けぬのもよく有りません。油ハ前の岩崎八重子さまへの答の第十一を御覽下さい。(二)仰向よりハ些し横に　かたむき、さうかとて全く横といふ程でも無いところが尤も眠るにいゝ位置です。

近藤清子さまへ　(一)顔のアレを手早く直すにリスリンを

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

用ゐるのが一番です。 (二)赤毛を黒くするのはいらつめ第廿二號にあります。 (三)二十四時間を三つに割り、八時間寝て八時間はたらき、八時間あそぶのが人間にもつとも適當な分量だらうです。 (四)神田邊でまづ寄宿處の正しいのは明治女學校(飯田町三丁目)です。

E.T.女史さまへ 前の近藤清子さまへの答の第二を御覽なさい。

なにがしさまへ (一)細君が他人に對して夫の事を「宿」「內」「私共」など、言ふのは如何にも仰のとほり色々ですが、やはり右の內のはじめ二つが今日のところ一番聞えもわるくムいません。「つれあい」といふのは大抵 夫が死んでもはや此世に居ぬときに用ゐる方が聞えがよいです。 名を指すのは手紙の外あまり聞よくも有りません。 しかし。なるべくは「チット」とでも呼びたいものです。 (二)髮を洗ふのは硼砂が宜しいです。 髮の毛を濃くする法に就ては前の岩崎八重子さまへの答への第一を御覽なさい、その法でよろしいです。 (三)蠅はいらつめ第廿三號の通信欄內にある法で取れます。 (四)蚊のたしかな驅除法は知りません。 これは時節がら必要ゆゑ、終りに疑問として置き、かならず次號に出すべき得です。

福島もり子さまへ (一)小兒が尿を寝て居る中に洩らすのは全く矢鱈に尿をせぬやうな習慣をつける事と、また小兒を冷やさぬやうにする事と、及び水物を多く食べさせぬことゝめこれらに注意するより外に法は有りません。 これだけよく注意すれば必らずその弊は無くなります。 (二)枳殼を丸のまゝ黒燒にし、等分に眞菰の灰を交ぜ、これを適宜に胡麻の油で解き、それを毛を生やうとする處へ塗り込む、この法はいらつめ第十八號に出て居た法ですが、一切何處の毛を生えさせるに用ゐてもしるしは有ります。

正修漁史さまへ 人參、唐白朮、貝母などは何の藥屋にもあります。 人參と唐白朮は貝母より高いです。

岡本道子さまへ (一)胡臭を去る法は前のみどりさまの答への第四を御覽なさい。 (二)原書には何ともありませんが馬鈴薯は生のが宜しいと思はれます。

A.O.女史さまへ (一)ちりめんの汗じみ及び濕氣のシミは素人の手際では旨く取れません。 (二)歯の黄色になつたのを白くする法はいらつめ第十六號にありました。 その法、稀い硫酸を襤褸に浸し、その襤褸で黄色な處をかろく拭ふのです

が、用心して口中の肉にその齒齦を觸れさせてはなりません。觸れさせると肉はたゞれます。　成効のあるかはり、きはどい法ですからよく御用心なさい。　そして既に齒をそれで拭つたなら決して唾汁を飮んではいけません。　かならず吐き出して、後は冷水で何度も口をそゝぐが宜しいです。　(四)御尋の女學校は普通科の女學校ですか。　または專門科の女學校ですか。　(五)仰のとほり胡蝶と細君とは讀んで害になりません。　その他には二葉亭氏の浮雲、さがのや氏の初戀、篁村氏の蓮葉娘、美妙齋氏のぬれごろも、紅葉山人の色懺悔などです。　(六)速記は女子のため今後見込のある職業です。

木島きぬ子さまへ　(一)波に兎をつけるくはしい原因は知りません。　(二)一度煮立てゝ、それを冷して置けば醬油に黴は生じません。　(三)梅一升鹽三合乃至二合五勺の割で漬けると梅の青漬へ出來ます。　漬ける前梅の實のなるたけ堅いのを擇まなければいけません。　(四)衣類についた油を拔く法はいらつめ第十九號にあります。

英文小說愛讀者何某さまへ　(一)人情小說で無いもので、讀んで益になる英文小說はドンキホーテ、スウィフトのガリバルス、トラヴェルス、ロビンソン、クルーソーなどです。　一般に言へばヂッケンスの諸作、サカレイの諸作、スコットの作、エリオットの作などが大抵よろしいです。　(二)思軒居士の譯されたユーベルはユーゴのクーデターです、英譯もあります。(三)ロングフェローの詩集もたしかウォルクス、オフ、ロングフェローでした。　一圓前後の書物です。　(四)アービングの雜文にはスケッチブックといふのゝ外にブレースブリッヂ、ホール〳〵といふのも有ります。

この外まだ澤山ありますが余白が有りませんゆゑ次號にゆづりました

西洋紀元の數へ方質問の答

前號に中山ゆみ令孃が西洋紀元の數へ方について質問を出されましたゆゑ廣くくはしい御こたへを世間から募りましたところ、左の方々が御こたへ下さいました。――

司馬あや子、山中しづ子、有樂町の何某、今村紫君子、築地　ミス、チハ。

御こたへ下さッた段は有難く御禮を申します。　いづれも同說ですからその中から一番くはしいのを撰んで今村紫君子のを載せ、たゞいらつめを皆さまへ一部づゝさし上げます

紫君子の回答

耶蘇降誕の年に就き中山ゆみ子孃の質問に對し

耶蘇降誕を以て紀元と爲せんハ實にシヤレマン帝の世に始る時の僧デオニシアス、なる者羅馬建立紀元七百五十四年を以て耶蘇降誕の年とし之より年代を算ふコレ現今用る處の西暦紀元の元とす蓋し馬太傳の記する處に依は耶蘇降誕ハヘロデ王存世中の事ふしてコノヘロデ王は羅馬建立紀元七百五十年ふは己に死去せし者なればデオニシアスの計算ハ少くとも四年の誤りありしや明〻されども其降誕の年は正しくヘロデ王の死去の年なるか將之より以前にありしや甚た不明瞭なれは(降誕の月は十二月廿五日なるや一月六日なるやふ就ても疑あるは其決定に依て又差なきを得す)其誤算は正しく四年なりと斷言する事難からん（尤も或る歴史にハ四年何月の誤算ありと明記したる者ありしやふ覺ゆれども如何なる計算に出でしや知らす）故に西暦紀元は耶蘇降誕より少くとも四年の誤算ありと知るを以て滿足せさる可からす

以上ハ生か見聞の儘を記するのみ幸に御參考と爲す、ともあらハ本懐々々

七月二日　今邨紫君子

質問

蚊を驅除する最上の法（たゞし衛生上無害のもの）。

右をたしかに御こたへになッた方へハその答を載せたいらつめを一部進上の事。

紀元の件を御こたへになッた方の中、有樂町の何某とあるのハ中の紙に宿所姓名が無かッたゝめ今だにわかりませんから御しらせを願ひます。　今わかッて居るのハ麴町區有樂町一丁目三番地本間方…といふたけです。

餘興

前號謎の答

(一)山彦
(二)米俵
(三)苦もあり（蜘蛛、蟷螂）
(四)絡（六、四、七）
(五)味噌（三十）
(六)假名の濁り（ゝ）

今回ハ例よりも多くの解釋を下さいましたが五番まではハ大抵當ッてをりますが六番ハ餘り深く考へ過ぎて當らぬのか多う

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

ムいましたから割合には答者が少く漸く
●櫻井きつ　●渡邊三吾　●加藤みさ
の三君でありました。お約束の通り新著百種一部づゝ差上げますが今日まで出版になつてをるものは第一集は紅葉山人の色懺悔第二集は篁村氏の堀出しもの第三集は思案外史の乙女心と紅葉山人の風雅娘です。何れなりともお好みの品を至急にお申込下さい

新謎の題は止むを得ず都合により今回休

月報

○上野行啓の御摸様　皇后陛下には去月十七日午前十時御出門にて上野公園の青年繪畫共進會へ行啓在せられたり着御暫時御休憩の上會員にて奏任以上の人々へ拜謁を仰せ付られ夫より會頭の御先導にて繪畫陳列場を御巡覽あり御晝餐の後再び出御ありて青年畫師の席畫を御覽になり右畢てお慰みとして野呂松人形長唄を演奏了りて夕景に還御在せられたり右につき美術協會より褒賞を得たる青年生の繪畫二十枚同師匠の分數十枚冩眞にしたるを獻上したりといふ又當日日本美術協會へ金百圓、青年繪畫會へ同五十圓、會員其他一同へ同三十圓を下賜せられまた繪畫會よりは合作物二幅を獻上したりとぞ

○華族女學校　麹町區永田町三丁目(赤坂御門內)へ新築中の華族女學校は既に全く落成したるに付き去る六日四谷仲町の當校より移轉したるよし

○幼稚園長拜命　築地一丁目の田中房子は今度京橋區公立幼稚園長兼保姆を拜命したるよし

○幼稚園設立の計畫　牛込區寺町なる森本祐外數氏が發起となり府下完全なる一の幼稚園を設立せんとて目下専ら該組織調査中の趣なるが重に米國風に倣ふ由にて設立の上は米國より女教師を招聘するの見込なりと云ふ

○唱歌講習の改正　唱歌速成講習所にては是まで男女丁年以上の志願者をして同時に授業し來りし所此度改正をなし丁年未丁年を問はず男女の混交の授業法を廢し各別々に授業するとよ相成るよし

○婦人救正會　越後高田にては大道長安氏其他の發起により婦人をして精神の快樂を得せしめ以て救正の精神を發揮し所謂卑劣の癡縛を解くを目的とし救正淨業を以て標準とし婦人救正會なるものを設立したりといふ

○滋賀縣私立高等女學校　に於て小學唱哥教員たらんと欲するもの、爲め尋常師範學校の程度によりて唱哥速成科を置き修業期を六ヶ月以内とし臨時傳習を開きしと云ふ

○女子の海外留學　府下本鄕區湯嶋天神町寄留福井縣平民中山甚兵衛三女ふゆ（十八）孃ハ學術修業の爲め向ふ五ヶ年間英國へ留學せんとて旅行券の下附を願ひ出てたりと云ふ

○鳥取の女學校　近來ハ女學の進步に連れ地方校舍の新築續々現ハるゝ中に鳥取にてハ近來女學校設置の問題婦人社會に起り終に男子の力を借らず有志の婦人自ら發起人となり寄附金の募集其他萬端の事に奔走し縣下市長などの細君令孃何れも自ら其任に當り己に夫々計畫も立ちたる由にて武井知事にも大に此擧を贊成せられ寄宿舍の建築費だけハ同知事並に夫人の手にて負擔さるゝと云ふ

○婦人功藝會　宮城菁莪氏其他女敎師貴婦人等の發起にて婦人攻藝會を設けんと昨今用意中のよしにて既に米國婦人三名を聘するの約整ひ當分ハ編物裁縫繪畫の三科を置き追てハ英語音樂の科を加へる目的なりと云ふ

○養育院窮民の理髮　京橋區新富町三丁目貳番地寄留廣嶋市平民理髮業植木豊吉ハ養育院窮民の狀態を悶察し向一ヶ年間毎月十七日の休業日貧民の理髮せんとて去る十七日ハ同院より男女童幼五十四人の九剃顔剃をなしたるよし奇篤の事にこそ

○聾啞原因　東京盲啞學校に於て本年四月末現在生徒七十名（盲二七啞四三）に就き失官の原因を調査し同校教授小西信八氏有益なる助言を與へられたれば玆に其概略を大日本敎育會雜誌より轉載すべし

盲生廿七名内（最年長廿三年三ヶ月、最年少十一年八ヶ月）生來の者三名を除き、夬官の原因を撿するに所謂胎毒に罹る者最多く、次にハ脾疳に罹る者とす、又年齡によりて撿するに二年に於て失官者最も多く、初年之に次く。

啞生四十三名内（最年長十九年四ヶ月最年少七年五ヶ月）生來の者廿二名を除き、失官の原因を撿するに所謂驚風に罹る者十名（殆後天性二分一）、又年齡によりて撿するに二年に於て失官者最も多く、初年之に次く。

今盲生と啞生とを對比するに盲生には生來の盲甚だ少くして啞生には半數を超ゆ、最も多き失官の原因ハ盲生は胎毒脾疳風眼にして、啞生は驚風なり、又盲生には初年より十九年までの間に失官者あれども啞生には六年以後の者なし、然れど

も兩者共に二年に絡も多し。

以上の事實に依れバ所謂胎毒脾疳及驚風ハ小兒の厄病にして三年以下の幼兒保育の責に任ずる者ハ最も注意を要する所ならん

生來の盲生三名悉く其父ハ大酒家にして内二名ハ從兄弟の結婚者なり生來の啞生廿二名内十五名の父ハ大酒家にして五名ハ從兄弟の結婚者なり、他の四名ハ酒を好まざれども從兄弟若くバ再從兄弟の結婚者なり。胎毒に罹れる盲生六名内四名の父ハ大酒家なり、脾疳に罹れる三名内二名、風眼に罹れる者三名内二名、驚風一名、腦病二名内一名、ヂプテリヤ一名、脈絡炎一名の父ハ皆大酒家なり又驚風に罹れる啞生十名内四名の父ハ大酒家にして其内二名ハ從兄弟の結婚者なり不詳者四名内二名の父ハ大酒家にして他の一名は從兄弟の結婚者なり。

右の事實に依れバ大酒及近緣の結婚ハ盲啞を產出する悪因とも云ふべきか、遺傳の恐るべきハ人皆之を知る、然るに七十名中遺傳に因ると云ふべき者一も無くして大酒家若くハ近緣結婚者の子に多きハ抑何に由るか、大酒の人生に害毒なるハ獨り大酒家自身の失態病患に止まらず、餘毒の子孫に及びて或ハ狂兒、或ハ痴愚或ハ盲、或ハ啞を產するハ統計家の確認する所にして其害の恐るべきを知らバ敎育に從事する我々ハ務めて節酒若くハ禁酒の風を振作せざるべからず。偖又近緣の結婚も癈疾不具者を產出する勢力ありと云へバ宜しく避くべきものなり。然るに予が鄕里越後長岡近傍の村落に至れバ從兄弟或ハ再從兄弟の結婚を多しとす、其口實を聞くに近親の疎遠ならんことを恐ると云ひ、或ハ互に心情を知悉し家風を熟知し萬事手輕に約束を整ふの便ありと云ひ、更に甚しきハ卑陋の諺をさへ成し從兄弟の結婚者を見れバ相慶祝する風あり而して、彼等の間に擧げたる子女を撿するに虛弱白痴若くハ腦病に罹るもの多し、若し此風をして長岡近傍の村落に止まらしめバ尙は可なり、全國此風ありとせバ勇々しき大事にして國家の元氣に關すること少少にあらざるべし、果して然らんにハ國家の爲めに禁厭の法を施すも可ならんか云々

○音樂學校卒業式　去る六日東京音樂學校卒業生徒の爲め卒業証書授與式を上野公園地內華族會館に於て執行せられたるが文部大臣辻次官を初め内外の紳士貴婦人令孃數百名參觀ありて卒業生諸氏並に前後同校の敎育を受けたる令孃洋服を着け替る〳〵彈し且つ唱し或ハ合奏し中々優美に見受又聞取りたり辻次官の祝詞伊澤校長の演舌等ありしが伊澤校長の演舌

筆記を得たれは其音樂に關し沿革變遷の必要なる點を左に掲載し唱哥の內を共後に付記す

今日は文部大臣並に次官閣下其貴顯の方々に御光臨を辱うし爰に卒業證書授與式の典を擧ける事を得ましたのは誠に本校の光榮と申す可き事で御座ります此度の卒業證書授與式は本校が東京音樂學校となりて以來始めて本科の卒業證書を出すに至りたる事で御座りますれバ此好期に際し數分時間御來臨諸賓の淸聽を煩はして聊か本校從來の沿革並に事業の大要を申し述べたいと存じますさて本校の起りハ元音樂取調掛と申まして丁度今より大凡十年の昔即明治十二年の十月に文部省內に置かれた者より始まりまして其後四年間は內外音樂の異同並に古今の樂典の沿革等を硏究致しまして遂に明治十七年の二月に至り其取調の成績を報告して先づ大略の所音樂上の理論と實地とに就て定見を立てゝ時の文部省たりし大木閣下に申報したる事でありましたか此事は音樂取調成績申報書として既に世の中に公になりた事で御座いますれば爰に再び詳說は要せぬ事で御座りますが沿革を申述ぶる序に其の大略を摘んで數分間御聞を願たいと存じますもと音樂と申す者は人の性情の自然に出づる者で御座りまするが古今東西其大本の原理に於ては聊か違ふべき道理もなく又實に殊なる所はない者で御座ります例へば音樂に於て宮商角徵羽の五聲の相關する理法の古今東西に通じて異なる所なきハ丁度數學に於て數理の相關する道理が古今東西の差異なきと一般なる者と申して宜敷かと思升す夫故に本邦の雅樂にある呂旋と律旋との二旋法は「ギッシャ」古代の音樂の旋法中に存し本邦の雅樂に在る二種の旋法も又「ギッシャ」古代の音樂の旋法中に存したる事は誠に明なる證據に依て論證いたし毫も疑ふ所は無い次第で御座ります只今日の歐米の音樂と本邦の音樂との異なる所ハ音樂の進步の度に於て異なる計りで決て音樂の大本に於て異なる譯では御座りませぬ今又數學の例を假りて之を說明しますれば我邦に於て和算のみを用ひて居りました頃ハ或は點竄とか極形とか云ふやうな者は有りても今日用ふる西洋流の代數とか或ハ幾何學とか申樣な者は御座りませぬ事でありましたが併し昔の點竄も今日の代數學も昔の極形も今日の幾何學も別に數理に於て異なる所がある譯でなくバ唯今日の代數學や幾何學は昔の點竄極形などに比すれば其方法が進步して遙に精微に至りた計りで御座りましよう音樂の旋法に於ても其通りで今日の西洋の音樂も昔「ギッシャ」時代の音樂も今日

の日本の俗樂なども其音律の原理に於て違ふ所は無れど只其進歩の度に於ては西洋の今日の音樂は「ギッシャ」時代より羅馬時代と經近代に至て進歩したる斗りで厶ます我邦に存する所の旋法は依然として恰も二千年前「ギッシャ」に在た頃の者と殆と同じ者でありまするから其進歩の度に於て大に異なる次第で御座ります此事は既に述べました通り今より五年前に報告せし所の申報書に詳しく述て御座り升れば今又此上貴重の時間を費す事は致しませぬ。斯く内外の音樂に就て其異同の點を調査したる上は自然の結果として如何なる音樂を以て我國家に施し教育上の裨補をなすかとの點に進みませうそこで猶ほ其音階の種類に就て講究するに音階には要するに二種御座りまして一は長音階と申し一は短音階と申します其の長音階に屬する所の樂曲は概して勇壯活潑の氣を帶び短音階に屬する所の者は柔弱淫靡の風を帶ると申す事は學理上に徴しても實地上に撿しても誠に明瞭で御座ります此理由が御座りまする故に普通教育に施す所の音樂は概して長音階に屬する所の物を用ひ以て勇壯活潑の氣象を養ひ且又信實忠愛等の情を養はなくてはなりませぬ夫故今日まで本校に於て普通教育に用ふるに適すべき樂曲となす所は多く此種類の物を取りま

した事で御座りまそ悲哀の情も愛憐の心も音樂上に無てよいと申す事では御座りませねか是等は人生長の後にこそ始めて其趣味を知る事なれども決して幼年教育に必要なる者では御座りますまい然るに若我在來の或る種類の樂曲の如き終始悲哀の氣を帶び或は云ふに忍びざる感情を引き起すが如き者のみを用ひ舛したならば其結果は如何で御座りませうか寧ろ音樂を學ばしめざるを優れるとするに至ろうかと思はれます。

前條申述べました如き次第故前四年間の調査を終へたる後は凡て學校に用ひ教育上に益を爲す可き所の唱歌音樂の撰定に其力を盡し遂に今日に至りまして過ぎ來し昔を顧み舛れば最早殆ど十年の星霜を經たる事で御座ります偖其成績は如何と申しますと音樂の如き者は其成長實に徐々たる者で御座りまして中々一朝一夕にして其効を見る可き者では無く其十年の星霜を費して數多の生徒を教育したるも能く其卒業に至らしめたる者は僅に六十五人にして其中男四十七人女十八人のみで御座ります併しながら此男女六十五人の者は今や殆ど全國各府縣に在て音樂教育の職に從事し全國の各都府に至る所殆んど唱歌の聲を聞かざる所はないと申して宜しい程になりましたのは又望外の結果とも申す可き事と存じます凡人心を感

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

動し精神を發揮するに至大至强の威勢を有することと唱歌に優れるものハ御座り升まい古人も歌は天地を動かし鬼神を泣かしむるの力ありと申し古來聖主賢相の音樂を以て治國の要具とされたるハ今又爰に申し上げる迄の事も無と存じます夫故筒樣な事例ハ省きまして先日下直に我國に不完全乍らも行はるゝ唱哥に就て見ても例へバ貧民子弟の教育に唱哥を用ひ之が爲めに猥褻の哥謠を頓に一掃したるの實例もありませう天長節の朝たよ當り全國各都府數十萬の生徒等が我聖天子の聖壽萬歲を頌し奉り忠君の情ハ海内に溢れ山河も遠く相應じ天人共もよ相和するの盛意を表したることもありませう紀元節に當りてハ全國數十萬の生徒が遠く二千五百有餘年前日本開始の大帝の浩德を敬慕し無限の感情を唱哥に發したるともありませう又聖天子の臨幸に當りてハ萬口一齊に君が代を唱ひ無量の愛敬を表したるハ實に諸君の耳底に猶存する所で御座りませうされバ今日まで我等音樂に從事する者が聊か國家の爲にし盡たる微忠ハ早くも既に其結果を現はさんとするに至りて實に感喜に堪へざる次第で御座ります又來年ハ本邦未曾有の一盛時にして全國中より議員を招集し集議院を開かるゝの大典が御座りませう此時に際し全國民一致合同の意志を一結し以て　帝室を尊び國家を愛するの感情を顯揭し全國一齊に此盛時の祝意を表するハ音樂唱哥に依らずして將た他に何物が御座りませうぞ。

君ハ神　　里見義作

きみハかみ、あらひと神、あめつちしろしめす、大君が、御稜威あふぎたふとめ、みなひと。つきひも、君が光りとなる實にいとかしこや。海のごとく、陸のごとく、千代ませ、我君、八千代も、いませや。

我大君　　中村秋香作

我大君の御世ながづきに、散ることと知らぬ菊をりかざし、菊おりかざし、とる盃よ影をうかべて、酌みかさねてよ。我友人よ、ほぎつゝ酌めや、千代萬代の、齡をのぶと、菊の下露。あなおもしろや、おもしろや、此日のまとゐ、此日のまとゐ。

さらバよ故鄕　　中村秋香作

心も波止場に、殘るやけむり。さらバよふる里、さらバよふるさと、いまこそ船出、いまこそ船出、いまこそ船出。帽子をうち振り、聲うちあげて、互よよばふや、たがひによばふや、まさきくあれと、まさきくあれと、まさきくあれと。

うち振る帽子も、よぶなる聲も、はるかにかすみて、遙に霞みて、われ〱、かくる、われ〱、隠る、波止塲ハ、波間に、われ〱かくる。

薄霞　箏曲　　里見義作

梓弓、はるの日影も、うす霞、かすみて見ゆる、糸柳、いつしかまゆを、かけ初めて、風もぬるめる、野邊ごとに、ハや萌え出づるはつ若菜、すゞな、すゞしろ、すがやかに、雪間に見ゆる、若みどり、かハらぬいろも、わさゞはや、摘みて祝ハん、春の若くさ。合打むれあそぶ、をさな子に、かたをならぶる、姫松も、みどりの空に、なく田鶴ハ、ちよの聲さへ、ろへてけり。合千代に八千代の、こゑつみろへて、筐にあまる、若菜ころ、行すゑながき、乙女子が、齢をこむる、花がたみ、春のこゝろぞ、長閑なりける。

夢　　中村秋香作

へだつ野山の限もなく、語ると見しハ、夢なるか、あはれ、ゆめなるか。

花の木の間に、更けゆく月、ゆめのゆくへや、いづこなる、ゆくへや、いづこなる。

夢路ハ、みちや遠からぬ、行きかひやすき、ふる里や、ア、ろの古さとや。

もり歌　　中村秋香作

永き日の、くるゝまで、蝶を追ひ、花つむと、園の内を、立ならし、つかれやせし、また飢もしつらめ、よき子眠れ。疾いねて、とくおきよ、明日もまた、ひねもすに、園の内を、立ならし、蝶に花に、むつれて遊べよや、よき子よき子、ねむれよ、眠れ。

富士の山　　加部嚴夫作

ふもとに雲ぞ、かゝりける、高ねよ、ゆきぞつもりたる、はだへハ雪、ころもハ雲、その雪くもを、よろひたる、ふじてふ山の、見わたしに、しくものもなし、にるもなし。外國人も、あふぐなり。わがくに人も、ほこるなり。照る日のかげ、ろらゆく月、つき日とともに、かゞやきて、富士てふ山の、みわたしに、しくものもなし、にるもなし。

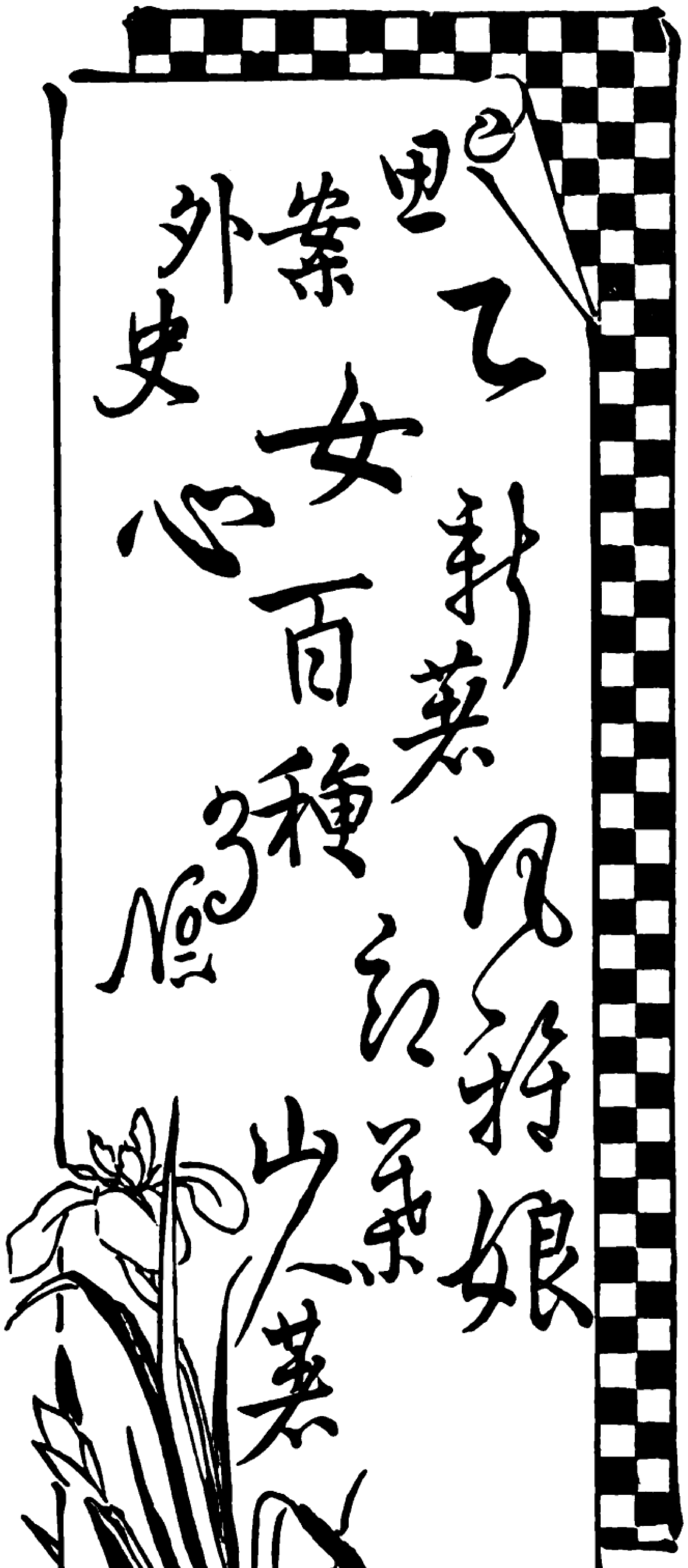
看客諸君へいらつめ第十二號最し御不用の御方候ハゞ買戻しなりとも又ハ爾後發兌のいらつめ貳回分と交換被下候とも御都合により宜敷候間御送り被下度候

但汚損つよきものと郵税先拂のハ御斷申上候

Digitized by Google　　Original from CORNELL UNIVERSITY

新書
百種
第二號

第一號いろざんげ第二堀出し者再版出來仕候間過日來御斷申候方へは送本致候又新規御注文も澤山被下度候



毎月一回發兌
一冊金十二錢
郵税二錢づゝ
廣告料一行十錢十行九十錢

東京神田
南乘物町
吉岡書籍店

●學術隨筆 博聞雜誌第四十一號目録●論說○皇朝木版考山下重民●寄書○天下ノ書生ニ告グ大谷川漁夫●歴史○伊達政宗ノ南蠻ヲ征セムトセシ說○佐久間象山ノ勅諭草案○外交古今ノ沿革●傳記○箕作博士ノ小傳○コロナル、オルコット氏ノ略傳●天文○印度ノ降雨○動物ヲ以テ晴雨ヲトス●地理○柏原宮ノ御舊趾○九陵御確定○市邊押磐皇子人御陵墓○横須賀鐵道○無籍村落取調○印度ノ佛足山(圖入)●人事○各國醫師ノ統計○長生不死ノ神法○拇印ノ不同○尾ノ有ル小兒●農事○牛耕ノ利德○竹筍ノ栽生○蕎麥ノ皮ヲ去ル法○鷄卵ノ僞造●工業○日光動力機○電影機○電氣鐵索○泳氣鐘ノ起原●商法○日本及カナダ間ノ貿易○米價昂低表●諸業○印魚ヲ使フテ瑇瑁ヲ捕フル法○北海道土人ノ樂器及唱歌●理化○新發明ウオーターガス○奇世ノ彈丸○猛烈ナル破裂彈藥●衛生○牡蠣ノ中毒○豬ノ寄生物○伊豆國小島ノパク病●教育○谷中將ノ女子教育談○實業講習場○生徒ノ學田耕耘●貨物○新製紙原料○絶大ノ毛綱○小便酒○馬博士ノ貨幣論●雜事○九數ノ奇ノ追加○汽車野火ノ中ヲ通過ス○犬車○人ニ似タル動物○昆蟲ノ多眼○猛虎伶女ヲ斃ス●廣告數十件

●毎月五日廿日兩回○一冊八錢○半年分十二冊金九十錢○八ケ月分十八冊金一圓卅錢○一年分廿四冊金一圓七十錢○爲替ハ芝口局○郵券代用ハ一錢券ニテ一割增

●發行所 東京京橋區弓町十番地 博聞雜誌社●

(遞信省認可)

明治二十二年七月十五日發兌

いらつめ第二十四號目次

社説　女學校の目的
日本女服改頁會
小説　補箕書第四回
家政　小児の育て方に付て
洗濯法一斑○○桐油‖襖紙‖象牙‖湯垢‖陶器及硝子細工‖マホガニイ‖金銀器‖縮緬‖汚斑
雨夜の品定め解釋
文藝美術　和文の變遷
柳櫻都錦繪
寄書　女學校の職員幷に教員を悉く女子にすべし
理論の危險
雜纂　大日本國風音樂會
日耳曼國音樂の大家モザート氏の傳
流行　單物○霖雨計かんざし○ゴム製珊瑚○中幅○パチン
淡線記音學
山間の名花
批評　堀出しもの
お八重
懸賞文藝　艋艇の尼物語
新題
通信　問答　夏帽子の垢しみたるを新しくする‖濃茶の害‖歯の肉色のあしきを治す‖諧文七騎落の作者‖和文及ひ和歌の注釋書‖假名遣ひの稽古本‖霖雨を防便に知る法‖橙花水‖月經の常より多きこと‖ニキビ急治の害‖パスタマックの効‖首筋の色の黒さを治す‖痰を去る‖咳の藥‖目の縁の腫れるを治す‖硼砂の効‖ヘチマの水
世界第一身体の色を白くする法
質問一題

社告

江湖の淑女君子の中で小説を著はされ、その刪正を望まれる時には成美社では左の條規に因って請求に應ぜる事と決しました。

（一）成美社では無手數で刪正する事。

（二）草稿返却の時に要するだけの郵税を著者から成美社へ宛て草稿と一途に送るべき事。

（三）四十日以内に成美社では草稿を刪正して著者に返却する事。

（四）草稿の秀絶なのは都合に因り。成美社で文を相當の價で求め、いらつめへ出すか、他の雜誌或は新聞紙に賣却の紹介を爲すか、いづれか爲す事、

（五）もし（二）の手續を著者が充分に履なかったならばその草稿は沒書する事。

右の條規に從ひ凡ろ、此規程を履んだ草稿をば成美社でも此規程を履んで取り扱ひます。以上五ヶ條に御不承知が有りませんなら折角御遠慮なく御申込なさい。

いらつめ

發兌	毎月十五日ニ發兌す		
定價	一册八錢	半年(六册)四十五錢	一ヶ年(十二册)八十錢
郵税	一錢	六錢	十二錢
合計	九錢	五十一錢	九十二錢

郵便爲替　郵便爲替は拂渡局名欄内ニ(神田郵便局)と記し受取人欄内に(神田平永町九番地成美社)と御認め被下べく候又郵券代用は郵便爲替の無き地ニ限り一割増ふれば妨ふし　但し一錢切手ニ限る

見本　見本一册入川の方は一錢郵券九枚にて發送可仕候

發行兼編輯人　山田武太郎　印刷人　佐野忠吉

東京神田區平永町九番地

發行所　成美社